

菅野正純さん追悼

古谷 直道（日本労働者協同組合連合会理事長/協同総研副理事長）

今から 15 年ほど前、JR 山手線脇に茶色いレンガ作りのビルの 2 階に「協同総合研究所」という看板があり、とても印象に残っていた。その頃、労働者協同組合というものがあることを知り、これを勉強するために、新宿から目白近くの雑司が谷にあった本部に通う途中で、車窓からこのビルを見ていた。

やがて、センター事業団に入り、協同総研というものが、労働者協同組合の研究所であることを知り、高田馬場のあの「協同総合研究所」もそうなんだということを教えてもらった。

ある日、このビルを訪問し、2 階の本がぎっしりの小さな部屋で菅野さんに会った。きりっとしていて、目が澄んでいて、ちょっと不思議な感じもあったが、研究所のことをていねいに話してくれて、いくつかの資料をいただいた。その中に、菅野さんが読んだ本の抜粋したものが含まれていた。そしてこの後ずっと、菅野さんが読んだ本の抜粋をもらい続けた。本を読むのが遅い私にとって、特に社会科学や思想上の書籍に弱い私にとって、それはとてもありがたい天の恵みのようなものであった。

特に、菅野さんが「協同労働」のコンセプトを磨き上げ、「新しい 7 つの原則」を

仕上げる作業の中で参考にされた原資料に関するものは、貴重であると同時に、これほどまでに精魂つぎ込んで協同労働を深めてくれているんだと感じ入ったものである。

そして、昨年 2 月 24 日の夜、はーといん乃木坂で開催されたケアワーカー集会の 1 日目、交流会が終わって、菅野さんと私はビルの 1 階から出ようとしたらそこは閉まっていた。2 人は地下一階に降りて、そこから外に出た。菅野さんは急ぎの仕事があるので自宅に帰るんだといって、急ぎ足で帰っていった。私は 2 次会に合流した。取り返しのつかない事故があったのは、その夜のことであった。

その事故の後、手術が行われ、リハビリにも努力された。4 月に会ったときには、明らかに意思が通じ合う会話が、筆談ながらできた。しかし、その後の手術と治療の中で、事態は好転しなかった。7 月には、菅野さんと 20 年来の親交のあった ICA のバルベリー二会長にお見舞いを頂いた。10 月にはシンガポールでの ICA 総会で、会長に菅野さんの近況を報告した。…しかし、…菅野さんの家族の必死の努力と広範な仲間・友人・知人の願いにもかかわらず、その後の回復は思わしくなかった。

そして、今年 1 月 11 日に、家族の熱い

願いを込めて再度の手術を別の病院で行うことになった。それに先立って1月5日、ご自宅にお見舞いに行った。私は車椅子に乗った菅野さんの真正面で、奥様のさまざまなお話を伺った。菅野さんもじっと私の顔を見ている。私もじっと見ていた。自分でも意外に、ふと、「菅野さんは、いい男だな!」と感じた。不思議な感じだった。…1月10日の深夜、容態急変悪化の電話。そして、1月11日17時35分逝去。

私は、菅野さんのような立派な男ではない。志・能力・誠実・真剣さともに劣るものだが、時代の流れの中で、労協連合会の理事長になった。ところが、私は前任者の

菅野さんから直接任務の引継ぎをしていないのだ。実に残念でならない。しかも、後少しで菅野さんがあんなに研鑽し、あんなに熱望して、実現に努力した「協同労働の協同組合」法制化が実現しようとするこのときに、どうして急に逝ってしまうのか。これが人間の寿命というものなんであろう。そう思うしかない。

安らかに眠ってください。

菅野さんの意志を継いで、法制化をなんとしてもやりきり、「協同労働」とその協同組合を日本の津々浦々にまで普及し、普遍化する、そのことを誓って哀悼の言葉としたい。

亡き菅野正純君を偲んで

黒川 俊雄（慶應義塾大学名誉教授/協同総研顧問）

協同総合研究所は、亡き菅野正純君の並々ならぬ情熱と知恵がなかったら、設立されなかったと思う。菅野君が昨年理事長になって、研究所は飛躍的に発展するだろうと密かに期待したのも束の間、残念でならない。設立当初、彼が専務理事となり、私は理事長になったが、設立に至るまで、そして設立後も長い間苦労を共にしたからである。

前号の「20周年を迎えた労協センター事業団へのメッセージ」の中で、「『協同総合研究所』設立をめざして『地域コミュニテ

ィ労働者協同組合研究所』をつくって慶応大学でシンポジウムを何回も開いていましたが、異なった意見をぶつけあって新しい方向を見つけ出すところまでいきませんでした」と書いた。だが、『設立趣意書』に書かれているように、「働く者が金力や権力の支配に反対するだけでなく、自らが主人公となる強い意志と対案を明確にして、協同の力で企業と地域を変革し、ひいては社会と政治の変革のための基盤をつくる」という意味で、「生産、サービス、流通、消費、情報、文化、教育、信用など、あらゆる協

同の運動が変革の立場に立って連携」するために、「実践と研究の交流」の場をつくるという「新しい方向」を示すことになった。

すでに、1987年に「いま『協同』を問うプレ集会」を開き、「いま『協同』を問う集会」を1989年から1990年代に回を重ねて開くようになり、21世紀に入って「いま『協同』を拓く集会」を開くようになってきた。すでに、一研究者として私は「労働組合運動と労働者協同組合」（『三田学会雑誌』）を1986年2月に発表し、「いまなぜ労働者協同組合か」（『賃金と社会保障』）を1986年3月に発表したが、協同総研理事長となつて実践を踏まえて、機関誌『仕事の発見』などに拙文を1990年代に連続掲載し、それらを編集して『いまなぜ労働者協同組合なのか』という著書を公にすることになった。

た。こんな大胆なことが暗中模索中の私にできたのも、今は亡き菅野君のおかげだと感謝している。

今や「変化する世界」で、人類は狂気の沙汰としか思えないような方向に進んでいる。このような方向を転換させるには、グローバル化によって「格差と貧困」が大きな問題になってきている現在、生活保護と生活困窮者の就労支援、および世界の大半の国々で実施されるようになってきている、生計費原則に基づく全国一律最低賃金制を軸とするナショナルミニマムの法制化とともに、労働する人間が協同で出資して経営と労働のあり方を変革する協同労働の法制化を実現し、『設立趣意書』にもあるように「大企業中心の体制を変革する」ことが重要な課題になってきている。

別れが突然やって来た

中川 雄一郎（明治大学政治経済学部教授/協同総研副理事長）

振り返ると、菅野さんと出会って20年が経ちました。いまこうして目を瞑って菅野さんの表情や立ち居振る舞いを追っていくと、いろいろなことが思い出されます。現在の労協（日本労働者協同組合連合会）が「中・高年齢雇用・福祉事業団（労働者協同組合）全国連合会」を名乗りはじめた頃に、菅野さんから声をかけられた。明治大学の和泉キャンパスで「いま協同を問う」（プレ

協同集会）を開催するので参加しないか、という誘いであった。しかし、所用のため参加がむずかしい旨を菅野さんに伝えました。その当時の私は、事業団についてわずかな情報しかもっておらず、したがって、「どうしても参加しよう」という気持ちが沸かなかったのかもしれませんが、しかし、「参加しなかったことの弱味」がしばらくの間私の心に残っていたこともあって、そ

の後何度となく鬼子母神の本部に菅野さんを訪ね、協同集会のことなども含めて事業団についての重要な情報を菅野さんからいただきました。

私は、1985～86 年にかけてイギリス・ブラッドフォード大学のピース・スタディーズに留学し「キリスト教社会主義と協同組合」のテーマを追い駆け、イギリスの労働者協同組合運動の歴史と思想を研究したこと、また 1980 年に開催された第 27 回 ICA（国際協同組合同盟）モスクワ大会に提出された『レイドロー報告』（「西暦 2000 年における協同組合」）がこれからの協同組合運動の優先課題の一つは労働者協同組合の発展であると強調していたこと、そして実際にイギリスやイタリアをはじめ西ヨーロッパの国々では「労働者協同組合運動の波」が現れていたこと、何よりもスペイン・バスクのモンドラゴン協同組合複合体（現在のモンドラゴン協同組合企業体）がかつてない規模で成長し、発展していたことなどから、日本でも「事業団としての労働者協同組合」を中心にした労働者協同組合運動の成長と発展が可能である、と考えるようになり、その後私はしばしば菅野さんを訪ねるようになりました。

菅野さんは、事業団・労協の指導者と言うよりも「労働者協同組合運動の研究者」と言った方が私にはピッタリします。1990 年代に入ると、菅野さんは私にイタリアの労働者協同組合、特に「社会的協同組合」について研究上必要な多くの情報を与えてくれました。それらの情報は私の協同組

合研究に「幅と深み」を増す機会を創り出し、やがて私の協同組合研究にある種の転機をもたらしてくれました。

1991 年に協同総合研究所が設立されると、菅野さんは、彼の研究者スピリットを発揮して、イタリア語で書かれた文献・資料・史料を日本語に翻訳し、協同組合を研究している人たちに「イタリアにおける協同組合運動」に関する重要な情報を与えてくれました。おそらくこの頃であったと記憶していますが、いまでは誰もが当たり前のように使っている言葉、「非営利・協同」という言葉を菅野さんが使い始めました。

「非営利・協同」というこの言葉は菅野さんが考え出した「究極の言葉」なのです。この言葉は、現在では、協同組合だけでなく NPO、コミュニティ・ビジネス、社会的企業、コミュニティ・ボランティア組織、アソシエーションなど「社会的経済セクター」のさまざまな組織を包含する言葉として多くの人たちによって使われています。この言葉はまさに労働者協同組合を愛する菅野さんの思想が生み出した言葉なのです。

菅野さんはもう一つ新しい言葉を流行らせました。「協同労働の協同組合」という言葉です。この言葉はもちろん、「労働者協同組合法」制定をめざして 2000 年に結成された「市民会議」の合言葉です。市民会議を結成したその同じ日の同じ会場（東京学芸大学）で開催された協同集会の名称は、これまでの「いま協同を問う」に替わって「いま協同を拓く」となりました。この名称の変更には「協同労働の協同組合法」に

基づいた「労働者協同組合運動の着実な前進」という願いが込められていたのです。

「協同労働の協同組合」の言葉が生まれた当初には、「協同労働」という言葉だけを取り上げて「木を見て森を見ず」の議論をする人もおりましたが、いまではこの言葉は、日本と諸外国の労働者協同組合の歴史、理念そして実践から帰納された、生きた実体として私たちの言葉となっています。先般、各紙は、「協同労働の協同組合」法制化のための議員連盟の結成について、読売新聞が「『協同労働』法制化目指す 超党派で議連」（2008年2月10日）、朝日新聞が「働く人が出資・共同経営 『労協』法制化へ議連」（2月20日）、そして日本農業新聞が「協同労働法制定へ 超党派の議連発足・坂口氏が会長就任」（2月21日）との見出しを付け、「協同労働の協同組合法」制定へ

の大きな歩みを報じました。議員連盟発会式の記念講演で、宮本みち子教授は「今日の若年ワーキングプア問題などは、単に雇用対策だけでは解決できなくなっている、経済的自立だけでなく人間的関係が持てる労働が必要と『協同労働』の重要性を指摘し」（『しんぶん・あかはた』2月21日）、「協同労働」という言葉が生きた、具体的な労働の概念であることを示唆してくれました。

菅野さん、君が考え出した「協同労働の協同組合」という言葉はいまや、さまざまな人たちの協同・協力によって、未来を指し示す言葉として私たちを奮い立たせてられています。菅野さん、別れが突然やって来ましたが、私はただ君に感謝と慈愛を捧げるのみです。（合掌）

菅野 正純 様

荒木 昭夫（京都児童青少年演劇協会事務局長/協同総研顧問）

菅野正純様。生前は随分お世話になりました。今も変わらず、お世話になっています。お出会ったのは1986年ごろだったでしょうか。まだ法人格を持っていなかった日本児童・青少年演劇劇団協議会（児演協）の組織をどういう法人格にするのか、とまさぐっているときでした。競争でなく、協同で生きることこそが、子

どもと一緒に文化を創る職業演劇人のあるべき生き方だ、と教えてくださったのは、あなたでした。私たちがこの確信にたどり着くまでに、ぐずぐずといつまでも右往左往していましたが、菅野さんは二度も三度も、私達の学習会に足を運んで来てくださいました。お渡した資料もしっかり読み込んで、ご助言をいただきました。

「良い仕事、尊厳ある働き方」。「出資し、経営し、その労働に参加すること」。これらは、戦後から今日までの 60 年間、私たちがやってきた生き方でした。演劇は全て仲間を信頼しあう集団の創造であったからです。ただ「出資」を除いては。

いいえ、「出資」という「ことば」そのものにも無縁の暮らしで、どこまでも、どこまでも低い収入で耐え抜いて、一日も早く自前の稽古場、つまり仕事の拠点を持ちたいと願って、劇団で貯金していたのですが、税務署から「余剰金も税の対象」と告

げられて仰天。本来なら、みんなで「出資」していればなんの問題もなかったのです。つまり私たちの活動を「協同労働の協同組合」という概念で捉えることに、全く気がついていなかったのです。

私も間もなくそちらに参りますが、そのときもまた、心安くご指導ください。そしてその後の、こちらの世界での成り行きをご報告したいと思います。生前にお礼を申し上げる機会もつくり得ず、うち過ぎておりましたことを恥じております。ありがとうございました。

菅野正純さんの逝去を偲んで

角瀬 保雄（非営利・協同総合研究所のちとくらし理事長/協同総研顧問）

協同総合研究所の理事長・菅野正純さんが、2008 年 1 月 11 日、永眠されました。昨年の 2 月に自宅で倒れられ、最後に転院された順天堂病院で亡くなられました。風の便りに一時はリハビリに励むまでになったと聞き、一日も早い全快を願っておりましたが、そこに突然の訃報です。

私にとって菅野さんは忘れられない一人です。私が菅野さんと最初に知り合ったのは、いつの頃だったか、もう遠い昔のように思われます。イタリア文化の研究者・佐藤一子さんの『文化協同の時代』（1989 年）の出版記念会の折でした。

その以前から菅野さんは、全日自労の書

記として忙しい労働組合活動の傍ら、プランディーニの『協同組合論—イタリアの戦略—』（1985 年）を翻訳出版されるなど、労働者協同組合運動の研究に取り組まれていました。

当時、私はイタリアの政治・経済に関心を持っていましたので、佐藤さんの会合に出かけ、その二次会で新宿のピアノバーに行ったのが菅野さんと付き合うようになったきっかけだったと思います。しかし、佐藤さんとは直接面識はなかったので、私が会の案内を頂いたのはどうしてかよくわかりません。それ以前、イタリア政治の研究家山崎 功さんを囲む集まりに出たことが

あったので、その関係かもしれません。

以来、黒川俊雄先生の研究会から発展した労働者協同組合運動のシンクタンクを目指す協同総研の設立（1991年）に加わり、研究者サイドからの副理事長として専務理事の菅野さんと行動を共にする日々が多くなりました。協同総研では労金協会の杉本時哉、つばさ流通の小西 明など若き日の大学時代の仲間と再会し、青春の日々を再現することができましたが、1990年代になるとお互いに還暦を迎え、体力が退化期に入ってきており、障害をかかえながらも、この運動に人生の最後を賭ける思いを抱くようになりました。私はマルクスの「共同社会」への展望を切り開くモメントとして、また大学時代からの協同組合運動の発展として、私なりに労働者協同組合を位置づけ、希望を託していました。

菅野さんは協同総研では労働者協同組合運動の理論化にリーダーシップを発揮されるという、立派な活動をされてきました。同時にあれあれと思う間に、日本労働者協同組合連合会の理事長となり、現場の運動のリーダーという重責を担うことになりました。一方、協同総研は幾代かの理事長を経て、内部の人材も充実するようになり、私は顧問として第一線からは退きましたが、2002年からは非営利・協同総合研究所のちとくらしの理事長として再び非営利、協同の運動にカンバックし、今日に至っております。

一方、病気になってから後の菅野さんは、連合会の理事長職を退き、協同総研の理事

長として病からの回復を待つことになりました。こうして私と菅野さんとは「仕事こし」と「医療・福祉」と領域は異なれ、人々の「いのちとくらし」のあり方に関わる問題と取り組むという点では共通した戦線で活動することになったのです。私には実践運動のリーダーとしてよりも、理論分野での活動のほうが、菅野さんには適していたのではないかとおりましたが、労働者協同組合運動が困難に直面するなかで、自ら実践のリーダーの立場に立たざるをえなくなったのだと思います。

菅野さんと最後にお会いしたのは、倒れる前の年に日本労協連合会の総会に呼ばれたときでした。その時、私のほかに研究者の参加がみられなかったのが気になったことを覚えています。以前、中西五洲さんの時代には若手研究者が寄り集まっていたのを思うと一抹の寂しさを禁じえませんでした。当時と比べると協同集会も大きくなり、連合会も大きくなった結果かと思いますが、それだけに遠くへ行ってしまったようにも思われます。

しかし、学生運動から労働組合運動へ、そして協同組合運動へと発展していった菅野さんの活動には目覚しいものがありました。とはいえ、菅野さんも人間ですから色々と問題を抱えていたことは確かです。そのビヘイビアには、時にどうかと思われるところがなかったわけではありませんでした。人に対する好悪の感情が強く、喧嘩速いということには定評がありました。条件反射的に異論を拒絶するきらいも強かったよう

に思います。学生運動家によくありがちな運動上の組織保全意識が、プラス・マイナスの両面に働き、それがしばしばそうしたことを生み出したのかも知れません。以前、協同総研時代、私も菅野さんと運動論をめぐって意見を異にし、時にはきびしく対立することのあったことを思い出します。

好漢菅野さんも、やがて還暦を迎えるのもそう遠くない年になりました。突破力よりも包容力が求められるとき、菅野さんが大衆運動のリーダーとして一回りも二回りも大きくなれることを期待していました。労働者協同組合運動は農協や生協のような既成の大きな組織の運動ではなく、少数派の新しい運動だったところからくる急ぎすぎと、焦りがあったのかもしれませんが。菅野さんはやがて病氣から全快され、研究所の理事長としての活動を期待されていたとき、想定外の事故によって帰らぬ人となってしまいました。惜しみてもあまりありません。協同労働の協同組合法の法制化運動が、

ようやく広範な共同を形成するという時に、菅野さんというリーダーを失ったことは協同の運動にとって大変大きな損失といえますが、その思想と行動は今後とも大きな影響をもち続けることは確かでしょう。どうか運動の未来を信じて、安らかにお眠りいただきたいと思います。

2008 年最初の「理事長のページ」は、個人的な追憶といういつもとは大変趣を異にするものとなりました。実は昨年末から新年にかけ、身近なところで 4 件もの訃報に接しました。いまなお病床にある仲間もおります。例年にない異常なことですが、これも私がそうした年齢になったからなのだと思います。昭和という時代が懐かしく思われる年まで生き長らえてしまったと思う今日この頃です。ご理解いただければ有難く思います。

(非営利・協同総合研究所のちとくらしより許可を得て、研究所ニュース No.21、2008 年 1 月 31 日より、転載させていただきました)

菅野さんの遺言

富沢 賢治 (一橋大学名誉教授/協同総研副理事長)

菅野さんとお付き合いを始めてもう 30 年以上経つ。その間多くのことを教えていただいた。心から感謝している。最後に会ったのは、昨年 4 月 14 日、初台リハビリテーション病院であった。目をきらきらと

させて、きわめて意気軒昂であった。彼とは筆談であったが、私を通してワーカーズコープの仲間たちへメッセージを送りたいのではないかと思えた。

十数行にわたる彼の文章は、「西欧の労働

者階級の運動の再生」から始まり、「極限の協同労働は、医療とケアワーク」とつながっていった。思うに彼は、患者として医療とケアワークを自ら体験して、そこに「極限の協同労働」を再確認したのであろう。そしてその体験を、彼が長年にわたって研究してきたイタリアの協同労働の最近の発展（社会的協同組合の急成長など）と結びつけ、「極限の協同労働」を基礎に置く「西欧の労働者階級の運動の再生」に希望を見出していたのではなかろうか。

日本のワーカーズコープ運動の発展も「極限の協同労働」を基盤にしたものであり、そこに日本の労働者階級の運動の再生がある。だから、ワーカーズコープの仲間たちよ、頑張っていてほしい。彼はそう言いた

かったのだと思う。

なんという鋭い頭脳と強い意志か。菅野さんを見舞いに行った私が、かえって彼から激励されたのである。

筆談のなかで彼は「協同労働ークロボトキン」とも書いた。できればその意味を聞きたかったが、できないままお別れを言わざるをえなかった。私なりに勉強したいと思っている。菅野さんは親切にも私に宿題まで残してくれたのだ。

菅野さんは常に時代の先頭を走っていた。そして、時代を駆け抜けていった。「協同労働の協同組合法」の成立を前にして。明治維新を前にして凶刃に倒れた坂本竜馬を、なぜか思い出す。

菅野正純さんを偲んで ―菅野さんの遺言―

堀越 芳昭（山梨学院大学教授/協同総研副理事長）

菅野さんがお亡くなりになったことはあまりにも残念なことです。それは日本のワーカーズコープ運動のみならず、日本の社会運動全体にとっても、そして協同組合研究の発展にとっても、大きな損失であると思います。特に、「協同労働の協同組合法」の成立をみないで永眠されたことに、いちばん残念に思っているのはご本人ではなかろうかと思います。

実に、わが国における労働者協同組合運

動・ワーカーズコープ運動について理論的にも実践的にも、そして政策論的にもその方向性を提示してきたのは、菅野さんでありました。

中高年雇用福祉事業団運動から労働者協同組合運動へ展開していったのには、菅野さんの功績が大きかったと思われます。労働者協同組合運動に福祉事業を重要な事業とする戦略的方向性も、菅野さんの役割が大きかったと思います。そして、わが国に

ワーカーズの協同組合法を立案していくことを提起してきたことの菅野さんの功績は、計り知れないものがあったといえましょう。

理論的にも、若い頃にイタリア社会運動の研究から出発した菅野さんは、イタリアの協同組合運動、スペイン・モンドラゴンに強い関心を寄せ、旧来の生産協同組合運動から新たな労働者協同組合運動の重要性に接近していくことになります。日本的ワーカーズコープ運動があるとすれば、その一つは労働運動として出発しつつ、協同組合運動としてさらに市民運動としての特質を備え、地域を基盤として地域を変えていくといった社会変革を志向する労働者協同組合運動の流れです。もう一つは、その出自が女性たちの生協運動であったワーカーズ・コレクティブ運動ですが、その出自上のちがいがあいながら、その有する諸特徴は共通しているように思われます。菅野さんは、まさしくこの日本的ワーカーズコープ運動の建設者の一人といってもよいと思います。

私は、菅野さんと協同総合研究所での研究会活動や調査活動と一緒に仕事をしました。菅野さんは、私の協同組合研究を高く評価してくださいました。私の株式会社論や協同組合資本論・協同組合法制論など、本人以上に深く読み込んでいました。媚を売ることなく常に率直な物言いの菅野さんが真剣に私に向き合っていたことに、ここから感謝しております。

いちばん思い出深いことは、労働者協同組合法制定運動を始めた頃行った調査研究活動でした。1997年のイギリス・ILO・ICAにおける協同組合法制の調査が最も印象に残っております。同調査は協同総合研究所の活動として、菅野さんと大谷正夫さんと私の3人で行いました。その成果が『英国協同組合法の提案と法案』（協同総合研究所、1998年）でした。もちろん、その調査の成果はそれだけでなく、菅野さんや大谷さん、そして私のその後の論稿や言説に示されています。この調査活動で、毎日毎晩のように協同組合のこと、日本のこと、そしてそれぞれの生きざまについて熱く語り合ったものでした。その時のさまざまな出来事ややり取りが、今日の私の礎の一つになっているのは確かなことです。

大谷さんもすでに他界され、いまでは私だけが残っているわけで、感慨深い思いがします。

かつて、その大谷さんが私たちに残された遺言は、「協同の哲学」を構築するということでした。それでは、菅野さんは何を遺言としていったのでしょうか。それは「協同労働の理論」を構築することであったのではないのでしょうか。菅野さんが着目した、雇用労働でもない自営労働でもない、第3の労働としての“associated work”です。この遺志に応えることが残された私たちの重要な課題であると思われます。

菅野正純さんの思い出

島村 博（協同労働法制化市民会議/協同総研主任研究員）

飲み屋で聞かされた話にまったく好意的に反応をしなかったこと、これが菅野さんとの出会った日についての記憶です。1998年の4月頃だったでしょうか。「労働者」、「自主経営」、「ソ連崩壊」といったキーワードでの論議を陳腐な話と受け止め、まともに相手にしたくないタイプに分類したものです。

1980年代の前半、崩壊プロセスに入った社会主義国、それも、ある種の見方からはもっともまともな社会主義国と見られていたハンガリーに留学し、生活し、政府高官を含め論議を交わしてきた経験からすれば、昔話の主題に関心なぞ持ちようもなかったから、というのが理由です。

協同組合との関連で、イタリアの経験を高く評価する見方にも同意しなかったのも、同君が爆発し、その日の飲み会が終わったことです。

比較法学の専門家として、いずれの外国の事例もモデルとしない、世間・マスコミ・識者が高く評価する仕組みであっても、日本での生育可能性及びこの意味での「普遍性」との関連でしか、外国の経験に関心を寄せない立場からは当然です。

菅野さんは、しかし、頑ななまでに、イタリアの事例を最先進事例とし、かつ、そ

の後の研究や実践の標にし続け、その傍ら、わが国での運動の経験をイタリアでのタームで語られる立場を崩すことがなかったと思います。冷徹な批評家の言葉を使うと、それは事大主義というものですが、憲法典で協同組合の振興を謳う条項を有する唯一の国、それ故に協同組合制度の現代的なあり方を規範的次元で示している数少ない国としてイタリアを意味づけ、わが国に紹介することを使命とした生き方の現われであると常々見ていました。

今、一つの扉を開けかかっている法制化運動は、一面ではイタリアの協同組合制度の翻案なしには起動力が与えられなかったものです。わが国の既存の協同組合論・実践を跳び越えるドン・キ・ハーテ的な運動として出発したと言ったほうが正確ですが、これは、菅野さんのイタリアへの思い入れから発出したものとして長く記憶されてしかるべきです。だが、それは、イタリアの制度そのものが普遍性を有しているということの意味しているわけではありません。制度を創らんとしたイタリア人の情熱を、彼を通して我々が土着化させたが故でのことです。

情熱を次代に伝送するランナーの役柄を彼は見事に果たしました。幽冥境を異にし

た彼が発することもかなわず、しかし、発
する言葉があったとして、私は「それは、

違う!」と、彼に返すでしょう。和しても同
じないお互いでしたから。合掌

菅野 正純さんへ

田中 夏子（都留文科大学教員/協同総研理事）

菅野正純さんへ。

菅野さんなら必ず元気になられるはず…
私はそんな確信を持っていて、「もうすぐお
見舞いに行ってもいい状態になりますよ」
という労協の皆さんの言葉に、心強い思い
を抱いていました。しかしそれが一転し、
早すぎる旅立ちとなったことを、通勤の帰
途、古村さんからのお電話で伺い、呆然と
したまま、しばらく駅のホームに立ちすく
んでしまいました。菅野さん、本当に残念
です。何より、菅野さんが 30 年かけて力
を尽くしていらしたことが、理論的にも運
動的にも実を結び始めたこの時期、もう少し
先まで見届けて、なおかつそこにまた新
しい理論と実践の可能性を投げかけ続けた
いとお考えだったはずで、そのことを思う
と、無念の思いがこみ上げます。

私が労協をお訪ねし、短期間であれ菅野
さんの間近でお仕事を一緒させていただ
くようになったのは、1986 年春、まだ鬼子
母神病院の 2 階に「中高年雇用・福祉事業
団」の名で事務所があった頃でした。朝、
事務所に外向くと「教宣部」という看板が
掲げられた事務所の一角には、すでに菅野

さんが座っていらして、文字通り、髪をか
きむしりながらイタリア語で書かれた文献
の翻訳に没頭なさっていました。その成果
は、次々と活字となり、『仕事の発見』の初
期のものをめくってみると、例えば「イタ
リア共産党における戦後の協同組合論争
史」の翻訳が掲載されていて、黎明期の日
本の労働者協同組合運動にとっては、示唆
に富む議論ばかりでした。

いまでこそ、協同組合先進地とされるイ
タリアにあっても、労働運動や政治運動の
流れの中で、協同組合が常にむずかしい位
置づけを与えられてきたことがうかがえる
ものでした。イタリアの 1980 年代は、既
存の政治団体主導というよりも、さまざま
な市民運動やアソシエーションの中から、
社会的協同組合の萌芽ができ、それがネッ
トワークをつくっていった時代にあたりま
すが、日本でも同様のことが起こりつつあ
ることを、あの小さな事務所で実感するこ
とができました。

当時、菅野さんは、日中は実践的な仕事
を抱えながら、早朝、海外文献を読みこな
し、それを日本の現実の中でどう応用して

いこうか、一見素通りしそうな、いかめしい運動用語を、人間が大事にされる暮らしや仕事創造のための言葉に、どうやって置き換えていくか、そうした課題を探究なさっていたのだと思います。

私は、菅野さんの姿を近くで拝見しながら、

学ぶことに対する真摯な姿勢の重要性をあらためて知ることとなりました。後に続こうと思いつながらも、私の方は挫折続きですが、菅野さんが歩こうと思われた道の、ほんの入り口付近だけでも歩けるよう、努力していきます。

故・菅野正純さんを偲んで：ありがとうございます

賀戸 一郎（西南学院大学人間科学部教授/会員）

私が故・菅野正純という方の存在を知ったのは、1997年の12月初旬です。

当時「宅老」所ケアのパイオニア的实践を、福岡の地で始めていた「よりあい」（代表：下村恵美子）について理論的に整理したものを、『宅老所「よりあい」の挑戦』というタイトルで、京都のミネルヴァ書房から7月下旬に出版しました。

菅野さんは、この拙書をいち早く目に留め、お読みいただいて、第3回平和・協同ジャーナリスト基金賞の協同部門の候補に推薦してくださいました。お蔭様で、選考委員会で、協同部門の奨励賞に選んでいただきました。その授賞式が東京であり、その席で間接的に菅野さんというかたの存在を知った次第です。

引き続いて、協同総合研究所の機関紙に、この本の概要について投稿させていただく機会も与えられました。そのお返しにという訳でもないのですが、協同総研の研究員

にも加えていただき、『協同の発見』や「日本労協新聞」もそのときから今日まで読み続け、菅野さんの理論的見解や発言・行動等を通じて、労働者協同組合や高齢者協同組合の基本的理念や今後の方向性、問題・課題への対処についても大所高所から学び続けていました。その意味からも私の理論的な師を失った感が強いです。

このような間接的な出逢いから、いちばん直接的な交わり、語り合いの機会を持たせていただいたのは、広島県下の大学に赴任した4年間の1998年11月8～9日に、当時の広島県立女子大学を会場に開催されました、「いま「協同」を問う'98全国集会—21世紀共生社会への提案：人と人おとのむすびつき—地域・くらし・仕事の再生へ—」の開催のための実行委員会開催の度に、菅野さんは坂林さんと一緒に、東京から広島まで来られ、真剣な討議を行った後、広島での飲食を囲んで談笑のひと時を数回繰り

返したことが、いま、懐かしい、良き思い出として脳裏を過ぎります。

このような私は、他の方々に比して僅かな交わりと語り合いで、本当の菅野さんを知り得ていないのですが、あなたとの出逢いに改めて、ありがとうございましたと御礼を申し上げます。夢半ばで、とても残念に思っていらっしゃったことと思います。

福岡の地でも交わりの機会がありました

が、私は、福岡の地であなたが育てられた多くの後輩の方々と一緒に協同の灯火と協同の輪（私個人の表現では共生くともいき>の思想と作法）を、しっかりと築いていきたいと思っています。

千の風となって最愛の由喜子さんやご家族と共に、残された私たち仲間もしっかりと見守り、導き、励まして下さい。

追悼 菅野正純様

高橋 五郎（愛知大学現代中国学部教授/会員）

菅野さんは必要な人物だった。事実として受け容れるのに、しばらくの時間が私にはかかった。それは、必要な人物がもはやここにはいないのだ、という驚きと残念さが混濁した気持ちのためだった。どんな追悼文を書いたところで、菅野さんは戻ってこない。とても残念に思う。

私にとっての菅野さんは、社会的公正を人々の普遍の原理として、その実現のために闘ったひとである。世の中、あまりにも不正と虚偽と自己保身が幅をきかせすぎる。菅野さんはこのような風潮を明確に否定しようと、永戸さんを代表とする仲間とともに頑張られたのだと思う。いつも弱者の味方として話し、行動した。

菅野さんは勉強家で、かつすばらしい感覚と知識を併せもつ、研究者であり運動家

だった。労働者協同組合という、協同組合論からみてもはなはだ興味の尽きない領域で論陣を張り、そしてその法制化のためにも運動してきた。いまや、労働者協同組合理論をいぶかしげに見る者はいなくなった。これも菅野さんの研究成果が、学界や協同組合分野で浸透したからにほかならないだろう。

菅野さんに初めて会ったのはいまから20数年前、私が財団法人農村金融研究会というところにいたときのことで。生産協同組合に関心のあったことから、高齢者福祉事業団という団体のあることを知り、私の方から出向き、活動内容や組織などを聞くため会いに行ったのが最初だった。当時、この分野の理論家であった石見尚さんの本を読ませていただいてもいたし、そのよう

な理論を実践面から取り組んでいる組織というものの実体をぜひとも知りたかったのだ。当時の私は、農協組織が生産者協同組合となることを頭に描いていた。そうなるべきだといまでも信じているし、そうならないかぎり、日本農業の明日はないと思っている。そしてそれは、まったく菅野さんの影響によるものだった。菅野さんが生涯をかけておやりになろうとしていることに、間違いはないと思っていました、人

をそう信じ込ませるオーラを持っていた。

菅野さんは、初めて会ったときもその後においても、まったく変わらぬ笑顔と、にもかかわらず、隠しようがなくときにこぼれる内に秘めた闘志を見せてくれた。それは、社会的公正を実現するための笑顔であり、闘志であったと思う。その意味で、菅野さんはみんなにとって必要な人物だったし、いまなお必要な人物だと思う。

2008年2月19日

菅野 正純さん追悼

横田 安宏（日本労働者協同組合連合会参与/会員）

菅野さん、突然のお別れとなり言葉もありません。この引き金となった1年前の貴兄の出来事は、私こそ、なって当然のことでした。13年半前に私が受けた厚生省指定の難病は、出血をしやすい血小板の異常で、その頂点が「脳出血」でした。いっそのこと年長の私があなたの身代わりになれたなら、と悔みます。

逆にあなたが私の身代わりになってくれたと思うと、心は複雑です。しかも、人一倍感染症に気をつけなければならない私は、あなたの入院以来お見舞いのタイミングを計りながら、とうとうその機会を逸してしまいました。見舞い客を受ける患者としての立場を知り尽くした、自分なりの判断でもありましたが。

病気のデパートのような小生が、永戸さんからの相談もあって間接的にあなたのためになればと、黒子を務めさせていただきました。当初の日赤広尾病院、済生会中央病院、そして順天堂医院とそれぞれに、それぞれの理由で関らせていただき、昨年末「これで大丈夫」と思った矢先の出来事でした。

2年前の1月、日本居住福祉学会が「労協に学ぶ」という研究集会を持つこととなり、全国各地から専門家たちが集まり労協の実践を学びました。その際も、菅野さんが率先して2日間にわたる講義を担当してくださいました。そのことが、労協と居住福祉学会の今日の関係をつくりあげてくれました。中継ぎをさせていただいた私の、

よき人生のひとつコマにもなりました。

自ら「理念のお化け」と称した菅野さん、文字どおりあなたのライフワークであった「協同労働」が、法制化をバネに「21 世紀の社会の基盤」として、花開こうとしてい

ます。あなたあってこそこの「協同労働」でした。残されたものたちは、必ずやあなたの志を受け継ぎ、尊厳に満ちた人間社会の確立のために汗を流してくれるでしょう。菅野さん、安らかにお眠りください。合掌。

労協運動にとって大きな損失

岩垂 弘（平和・協同ジャーナリスト基金代表運営委員/元朝日新聞編集委員/会員）

初台リハビリテーション病院に入院中の菅野さんを訪ねたのは昨年（2007 年）4 月 28 日のことだったが、リハビリ中の菅野さんは至極元気で、この調子だと必ず全快され、現場復帰されるだろう、というのがその時の私の印象であった。それだけに、1 月 11 日夜、突然の悲報に接した時は、とても信じられなかった。正直、何が起きたのだろうか、と不審に思ったものだ。まだ 50 代の若さ。その早世が、かえすがえすも残念である。

早世が悔やまれるのは、菅野さんが年齢的に若かったからだけではない。日本の労働者協同組合運動の理論的指導者の一人であり、その運動の、文字通りトップのポスト（日本労働者協同組合連合会理事長）に就かれていたからだ。長い運動が実って、労働者協同組合の法制化が、ようやく日程にのぼりつつある時期での菅野さんの突然の逝去。まさに日本の労働者協同組合運動にとって大きな損失と言える。

個人的にも、お世話になった。1994 年 6 月にスペインのビットリアで CICOPA（世界各国の労働者協同組合の集まり）の世界会議が開かれた。日本労協連もこれに代表団を派遣したが、私もそれに同行させていただいた。この会議を通じて世界各国の労働者協同組合運動を取材するのが狙いだったが、この代表団に菅野さんも加わっていて、何かとご教示いただいた。

お世話になったことは、まだある。私がかかわっている平和・協同ジャーナリスト基金の基金賞選考委員を務めていただいたことだ。毎年、実に的確な選考とご講評をいただいた。

基金は 1999 年に鎌田實・諏訪中央病院院長（当時）の論考「鎌田實がたずねる地域医療の先達 若月俊一・早川一光・増田進」に第 5 回基金賞奨励賞を贈呈したが、これを強く推奨したのが菅野さんだった。鎌田氏がその後、めざましい活躍で全国的な注目を集めているのはご存じの通り。私

は、菅野さんの、ものを見る目の確かさに

敬服したものである。

菅野正純さんの逝去を悼む

宮坂 富之助（早稲田大学名誉教授）

菅野さんの訃報に接して、私は言葉を失いました。無念としか言いようがありません。時間が経つにつれ、出會いの時の強い印象、シンポジウム、研究会での活躍など、私の記憶のなかで、そのすべてが鮮やかに浮かび、悲しみと切なさがつのります。

彼との初めての出会い、それはもう十数年も前のことになるでしょうか。生協総研の前身である研究所で生協法の研究会を開いていた時のことです。研究会が一段落して休憩していた会場に、前ぶれもなく私に面会を求めて来られました。「働く人が組織する協同組合の法制度を造りたい。そのための専門的な助言を頂きたい」という趣旨でした。私には、そのとき初めて労働者協同組合運動の海外での状況を知るきっかけとなりました。労働者自身が働きかつ管理するという発想は、人間が「労働する」ことの意味を根源的に問い直すことを意味するだけに、運動の理念は新鮮で魅力に富むものでした。しかし、想定される制度の広がりを見ると、労働立法が「従属労働」を前提にしている現状に、どのように理論的に対応し打開するかが、大きな問題であり、新たな理論構成を迫られる。そう考え

て消極的な姿勢を示す私に、「海外で実現している仕組みが日本でできないはずはない、何とか助力を頂きたい」と情熱を傾けて語りかけてきたのでした。

その後、協同総研が設立されてまもなく、法案づくりの研究会を設けて私が協力することになりました。難問題を予想しながらも敢えて協力しようと私が決断したのは、彼との最初の出合いのときの、ひたむきに志を貫こうとする強い意志。その意志の固さを少年のように、純粹で澄んだ、まるいひとみに見たことが、強く印象に残っていたからでした。

研究会を主宰する私の企画で可能な限り短期間充実した議論をしようと思いましたから、ふりかえると、まことにハードなスケジュールでした。しかし、彼は会合ごとに常に新しい海外の資料を準備してくれました。島村博君も、議論のポイントを的確に、法律的に整理してくれました。私は、この組合組織の特質を表現し、基軸になる概念として、「協同労働」をキーワードにすることにしました。その後、この作業が進み、今日の法制化運動の基礎ができあがったのでした。

いま、多くの人びとの努力が重ねられ、協同労働協同組合法の成立の道のりが現実のものになりはじめました。「人びとの協同によって働く」、「従属労働からの解放」、そのことの意味を問い続けた彼の志は、ようやく実りはじめたのです。今にして思えば、その志の実現に向けて、彼は全力を尽くし身を削っていた。もう少し健康に留意して欲しかった。それが残念です。

天与の生には限りがあります。生を失い、

その志が半ばとなることから逃れることはできません。しかし、これからは、その志を継いで運動はさらに大きく前進します。そのようにして、「彼」は生き続けます。私はそう信じています。

菅野さん、ご苦勞様でした。あなたの私への信頼と友情に、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。はじめて出会ったときの、あなたのひとみの輝きを忘れません。いまは、どうぞゆっくりお休み下さい。

追悼 菅野正純様

的場 信樹（くらしと協同の研究所理事長）

菅野正純さんのご逝去に際し、協同総合研究所の活動を通じてお付き合いさせていただいたものとして心から哀悼の言葉を述べさせていただきます。

菅野さんは 1991 年の設立以来、長く協同総合研究所のお仕事をされてきました。それ以前、菅野さんはまずイタリア協同組合運動の紹介者として登場します。それが 1985 年の『協同組合論—イタリアの戦略』でした。その後は一貫して、労働者協同組合を日本に根付かせるために、ヨーロッパ等の新しい協同組合制度の紹介と研究に努めてこられました。この分野の研究において、菅野さんは間違いなく日本の第一人者でした。

そして、なによりも、菅野さんは日本最

後の協同組合主義者だったと思います。尊敬の念をもってこう呼びたいと思います。このことが菅野さんの個性でもありました。協同組合主義者は、なによりも世界の変革に生涯を捧げる革命家であり、理想に生きる人でなければなりません。菅野さんは、まさにそのように生きられました。

また、協同組合主義者は社会改良家でなければなりません。そのために、運動面はもちろんのこと、事業や経営にも精通している必要があります。まさに、菅野さんは理論家でしたが、空論家ではありませんでした。だからでしょうか、菅野さんの話にはいつも独特の迫力がありました。

そして、協同組合主義者には協同組合に対する深い信頼と確信が必要です。この点

でも菅野さんは、首尾一貫していました。もっとも協同組合らしい協同組合として、労働者協同組合への確信が揺らぐことはありませんでした。

協同組合主義者は頑固でなければなりません。そして、事実菅野さんは頑固だったと思います。菅野さんの批判は、ときに鋭く厳しいものでした。いまこの瞬間にも、菅野さんのあの声が聞こえてきそうな気がします。しかし、たとえ意見や立場を異にすることがあっても、菅野さんの自らの発言に対する誠実さを疑う人はいなかったと思います。菅野さんは、論敵からも尊敬される存在でした。

いま、協同労働の協同組合法制化への道は、まさに胸突き八丁のところにさしかかっていると思います。ここまできて、道半ばで逝かれたことは痛恨の極みであったことでしょう。しかし、菅野さんの遺志を継ぐ人がいます。これからもっと増えてくることでしょう。これからは、菅野さんの分身が協同労働の法制化を現実のものにし、労働者協同組合をこの世界に根付かせていくのだと考えることにします。

そして、真の協同組合主義者としての菅野さんの跡を継ぐ人が、これからも必ず現われると信じたいと思います。菅野さん、どうか安らかにお休みください。

菅野君の死を惜しむ

田中 学（日本高齢者生活協同組合連合会副会長理事/東京高齢協理事長/会員）

昨年、菅野君が入院したと聞いて心配していたが、その後の話では快方に向かっているということだったので、間もなく元気な姿をみせてくれるものと信じていたが、突然の訃報に驚いた。

私が菅野君と最初に会ったのが、いつ頃であったか正確には覚えていないが、数年前に「協同労働の協同組合」法制化運動の相談で、杉並の大学生協会館を訪ねてこられたときが最初ではないかと思う。以来、たびたび会う機会があったが、多くはやはり協同労働法制化に関する会議や集会など

であったと思う。

日本の協同組合活動は、事業の面でも運動の面でも現在では世界的に見ても、かなり発展しているといえる。農林漁業などの第一次産業分野をはじめ、近年、消費者生協の発展も著しい。しかし、取り残されている分野がまさに、労働の次元であり、協同労働という「働き方」の問題であった。

農業の分野などでは、昔から田植えや収穫作業などの農繁期には「ゆい」などの協同労働が慣習的に行われてきた。近代社会の工場や職場でも、日本的労使関係という

ものの中にいくらかそういう慣習が影響しているとも言われてきた。しかし、1980年代以来のいわゆる市場原理主義＝競争社会においては、派遣労働、パートタイマーなどの非正規労働者が激増し、労働という人間社会＝働き方と生活の根源である人間性よりも、効率や企業利益を優先する「無法状態」をさらけだしてきた。このような状況の中で、ともあれ働く者が、自分達でお互いに協同し、苦勞しても自分達の意志と助け合いによって働くことによって、それを克服しようとして菅野君たちが立ち上げたのが協同労働の法制化運動であったといえる。とりわけ、菅野君はライフワークのように、その実現のために頑張っていた。

法制化は、実現に近づいたと思うと、障害にぶつかるなどして現在に至っている。

しかし、菅野君たちの懸命な努力により、近い将来にその成立が見えてきたと思う。

その実現を見ずして、菅野君が逝去したことは、当人にとってもさぞ心残りであつたろうし、制定運動にとっても大きな損失である。あの眼鏡の向こうで、いつも笑顔を決やさなかった菅野君が、今でもいつものようにニコニコとして現れるような気がしてならない。

菅野君、「協同労働の協同組合」は必ず実現します。どうか、ゆつくりと休みながらその時を待っていてください。

菅野さんが若い人たちに伝えたかったこと

中田 重厚（明星大学人文学部人間社会学科教授/会員）

菅野さんと私とは大学の同級生である。とはいっても、そのことを私が知ったのは私が卒業後20年も経った1980年代の頃だったし、それも、『イタリアの協同組合』の訳者が菅野さんであること、そして彼がまたま私と同じ大学の出身であることをそのときに知ったからである。

その頃、私はようやく協同組合運動の重要性に気づき、その関連の本を読み始めた頃だった。菅野さんは私より一回りも年が下で離れているが、この分野ではずっと先

を歩いていた。大学では、私は社会学を専攻したが、彼は歴史学を専攻し、遠山茂樹教授のゼミで日本近代史を学んだ（という話をごく最近本人から聞いた）。

そんなよしみで、一昨年の6月に、私がいま教鞭をとっている大学の特別講義をお願いしたところ、快く引き受けてくださった。そして、もう一人の講師として田中羊子氏を紹介していただいた。私の講義担当科目は「社会史」で、イギリスの協同組合の歴史を中心に世界の協同組合運動を講義

していたので、お二人からは日本の協同組合運動の現状について話をお聞きすることになった。お二人の話は大変新鮮で興味深いものであった。

菅野さんのお話の中で特に印象に残ったのは、次の二つの話である。一つは、菅野さんご自身が体験されたことで、彼がいまの職に就く前には、生活の必要からさまざまな仕事を体験されたが、ある時期病院の清掃の仕事をやることになった。その当時は、ゴミの分別収集もいい加減で、普通ゴミも危険なゴミもごっちゃに捨てられていたので、清掃現場からの意見として、分別して捨てることを病院側に提言したところ、その提言が取り上げられ、これまでの廃棄の仕方が全面的に見直され、改善されるに至ったという。

もう一つの話は、最近出版された本で、安倍司さんという人が書いた『食品の裏側』という本についての話である。著書の安倍さんは、ある食品会社で、出来るだけ低価格で本物に近い味、色、食感などを出すことを追及する仕事を行っていたが、あるとき、自分の毎日やっていることがとんでもないことであることに気づき、ハッと目が

覚める。ある日、仕事を終えて家に帰ると、その日は、娘の誕生日で、食卓にはごちそうが並んでおり、その中には何と自分が開発した“まがいもの”の食品が含まれていたからである。それ以来、この人はその会社をきっぱり辞め、安全な食材のみを使った食品加工会社を自ら興していくという話である。

以上の話を通じて、菅野さんは学生たちに何を伝えたかったのだろうかと考える。今日の経済社会システムの生産力第一主義や物質主義の価値観の下で、それぞれの仕事の中味は歪められているが、その仕事の真価を知りうるのは労働者自身にあるということ。だから、まず、おのおのが毎日行っている仕事そのものにきちっと向き合い、そこから現状を変えていくことによって、未来が開けてくるということである。菅野さんが言いたかったことは、大きなことを行うためには、まず「隗より始めよ」ということではなかったかと思う。

ワーカーズコープやワーカーズ・コレクティブの運動が日本全土に大きく広がってきている。菅野さんの思いを引き継いで、私も微力を傾けたいと思う。

菅野正純さんの死を悼んで

岡本 祥浩（中京大学総合政策学部教授/日本居住福祉学会事務局長/会員）

日本労働者協同組合連合会の理事長を退

かれたという報に接し、「あれっ」と感じて

おりました。本年早々に「菅野正純氏逝去」という知らせを聞き、誠に残念な思いで胸が多い尽くされました。

いま、『協同の発見』(第163号)を手にし、2006年の冬、労協を日本居住福祉学会第13回研究集会で訪れたことをしみじみと思い出しました。労協活動の理論的礎を要領よく、順を追ってお話いただきました。そのこと自身にも感じ入りましたし、知的な刺激を大いに受け、気分が高揚したことを覚えております。しかし、私はなによりも「菅野正純さんが「生活とは何なのか」を考え、「生活」に正面から向き合っている」という印象を持ちました。

ところで、「労働」と「居住」は不可分の関係です。「労働」は、いかに一人ひとりの思いを実現させていくのか、であると思います。「住居」はその活動を支え、基盤となるものです。労働で使ったエネルギーを補い、疲れを癒し、新たな活動を始める活力を養うのが住居の役割です。そうした役割

を果たすためには、適切な空間を提供することと就労の場との適切な地理的關係を住居が備えていないといけません。「住居」と「労働」が適切に連携して初めて適切な「居住」が実現します。

しかし、今の日本は「労働」も「住居」も、そして「居住」も「市場」に飲み込まれています。狭くて高い住宅を確保するために目一杯に働き、長時間労働と長時間通勤のために自宅では寝るだけの生活です。そこには、少しも人間らしい暮らしがありません。

「労働」と「居住」が本来の意味を取り戻し、適切な関係を取り戻すことができ得れば、人間らしい暮らしが実現できます。全てにわたり「市場化」が進展している現在、「労働」と「居住」の両面から人間の暮らしの実現に向けての「共闘」が必要とされる今、菅野正純さんを失ったことは残念ではありません。

菅野さん、 あなたが蒔いた種をしっかりと育てます

池田 晴男（国労函館闘争団・事務局長/労働者協同組合・道南ネット/会員）

菅野さん、今、あなたのことが走馬燈のように頭の中を駆けめぐっています。少しニヒルめいたような恥ずかしそうな笑いを

うかべながら、いつもあったかい眼差しを向けてくれていたあなたの存在の大きさをあらためて思い知らされています。

あなたと初めてお会いしたのは 20 年ほど前になりますね。国労組合員の私たちが JR 会社に採用を拒否され国鉄清算事業団に収容されていた時でした。国を相手にした闘いという性格上「長期闘争になるかも」と考えていたときに、東京の常岡雅雄さんからの紹介で函館に来ていただいたのが始まりでした。それ以降も、函館や東京でお会いしたり、電話やメールでのやりとりを通じて、いつも示唆に富んだお話を伺わせていただきました。年齢が同じということやあなたの気さくな人柄もあって、旧知のようなおつき合いをさせていただきました。

国鉄の分割・民営化によって JR から採用を拒否され、3 年後に国鉄清算事業団からも解雇された道南の国労組合員 20 名は、1990 年 4 月に函館闘争団を結成し、解雇の撤回と JR 復帰をめざして闘い始めました。

函館闘争団が地域に根を張り、闘争団闘争と地域の課題を結びつけながら 20 年もの長期にわたって闘い続けてくることができたのは、菅野さん、あなたとの出会いがあったからなのです。

私たちが闘争団闘争に踏み込んだ時代は、地球規模での環境破壊が叫ばれ、高齢化社会における福祉のあり方を問う声が高まってきた時代でもありました。闘争団の議論は、この時代状況のなかで、地域に生き、地域から闘いつづけるにふさわしいがんばり方を見つけることに集中しました。この議論のベースとなったのが、清算事業団の時に菅野さんが熱っぽく語ってくれた非営

利・協同の思想だったのです。とりわけ、中高年事業団から労働者協同組合運動へと続く取り組みは、私たちにとって大きな指針となりました。これらの労働者協同組合運動の実践に学ばされることの多かった私たちは、「地域に必要なかつ有用な仕事を自らが創り出すことを通じて解雇撤回の闘いと生活を両立させよう」と、方向付けたのです。こうして、あなたが名付け親とも言える函館闘争団の事業体・労働者協同組合・道南ネットは誕生したのです。

解雇撤回の闘いを維持するためだけに働くことから、地域にとっても有用な形で頑張ることができれば、闘争団闘争にもっと積極的で豊かな意味を付け加えることができるのではないかと、という方向付けは、国を相手にした困難な闘いにもかかわらず、私たちに勇気と展望を示してくれるものでした。「明るく、楽しく、したたかに。そして地域で多数派になろう」との函館闘争団のモットーは、菅野さんが蒔いてくれた種を私たちなりに成長させたものなのです。

このようにして方向付けた闘争団の取り組みは、障害者福祉にかかわっている人々との協同へと発展し、障害者の自立と社会参加をめざす共同作業所の立ち上げへと結びつきました。さらにまた、地域で高齢者の人間的な生き方にかかわろうとする高齢者協同組合・道南地域センターの設立など、非営利・協同のネットワークづくりへと前進してきています。

長期闘争となっている国鉄闘争にあって、闘争団闘争と「協同」の思想の結びつきは、

私たちが国による解雇という攻撃にも屈さず、解雇撤回の旗を掲げながら地域での課題と格闘するためのエネルギーとなりました。あなたが蒔かれた種は今、私たちのなかでしっかりと芽吹き育っています。

病床に伏しながらも、懸命にリハビリに励み復帰をめざしていたあなたを見舞うこともできず、こうして追悼の言葉を記さなければならないことは痛恨の極みです。ここ数年、あなたがその法制化に向けて情熱を傾けてきた「協同労働の協同組合法」は、あなたの努力もあっていよいよ手の届くところとなっているのです。それを見届けることなく逝かれたあなたは、さぞかし無念な思いだったのではないのでしょうか。そし

てあなたに先立たれたご家族や仲間の皆さんの悲しみを考えるとき、私たちには慰めの言葉も見つかりません。

しかし菅野さん、あなたはこの社会に、働く者の未来のためにかけがえのない種をしっかりと蒔かれたのです。私たちは悲しみの中でも、あなたが蒔かれた種を育て、もっともっと広げていくことをお約束します。あなたの指し示してくれた「協同労働」の質的・量的発展のなかにこそ希望を見出せるからです。

お別れにあたって、函館闘争団 20 年の生活と闘争に豊かな指針を与えてくださったあなたに心よりの感謝を申し上げます。菅野さん、ありがとうございました。

『協同の労働』とは、相手の命が輝き、膨らんでいく労働 —菅野正純氏のご冥福をお祈り申し上げます—

小林 勉（生活協同組合コープかながわ理事長）

菅野正純協同総合研究所理事長のご逝去に、心より哀悼の意を表します。

「協同労働の協同組合」法制化がいよいよ正念場を迎えようとした矢先のことだけに、本当に残念な思いです。

「協同労働」と私たちコープかながわとの関わりについて振り返ってみますと、今からちょうど 20 年前の 1988 年に、当時退任した組合員理事が中心となってワーカーズ

コープの研究会を発足させたことがはじまりでした。そして、1990 年にはコープかながわの「ホームヘルプサービス」の委託事業として「愛コープ」第 1 号が設立され、また同年にはさまざまな分野での「仕事おこし」を目的とした「キュービック」も設立されました。

以来、「キュービック」はコープの事業に欠かせない存在としてパートナーシップを

強めており、またワーカーズの数もその後「愛コープ」を中心に着々と拡大し、介護保険やホームヘルプサービス事業で地域にかけがえのない存在として役割を発揮してきました。

しかし一方で、ワーカーズコープ（労働者協同組合）には法的な基盤がないために、その運営については様々な苦勞をしています。「キュービック」も企業組合という形態をとらざるを得ませんでした。

今から8年前、コープかながわのワーカーズ連絡会が、当時協同総合研究所の副理事長をされていた菅野氏を講師に招き、学

習会を開催したことがあります。その中で、菅野氏は「協同労働」について次のようにふれられました。「働く人と利用する人が協同してサービスの内容をつくる。相手が喜んでくれるという体験を積んで自分の生き方が見えてくる。私は『協同の労働』とは、相手の命が輝き、膨らんでいく労働のことだと思っています。」

菅野氏の言葉は、まさに今、生活協同組合に働く私たちにとって投げかけられた言葉として受け止めなければならないと思います。菅野氏のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

菅野さんを偲ぶ

菊地 謙（労協船橋事業団専務理事/協同総研常任理事）

菅野さんと初めて言葉を交わしたのは、もう15年も前、私がまだ労協に入りたての頃だったと思う。「新卒」として採用された私たちに対し、研修の講師として来られた菅野さんが何の話をされたかは覚えていないが、講義が終わってから「菅野さんは疲れませんか？」という質問をしたことをおぼろげに覚えている。何でそんなことを聞いたかは忘れてしまったが、バブルを経ておよそ社会運動などというものが消えた1990年代に、「社会を変えるぞ」という菅野さんの意気込みに触れ、どうしてそんなにアツくなれるのか、というやっかみ

半分、皮肉半分だったのではないかと思います。

以来、労協人の“はしくれ”として曲がりなりにも運動と事業に関わってきたが、年を経るにつれ、菅野さんのように理想を持って広い視点で社会一般に通用する理論を研究し、世界の協同組合運動の潮流を紹介する人がいかに貴重であることを実感し、研修で生意気な質問をしたことをひそかに悔いた。

7年前、菅野さんが日本労協連理事長に就任するのと入れ替わりに協同総合研究所の仕事に就くことになり、何度も原稿執筆をお願いしたり、集会やシンポジウムでの

パネリストやコーディネーターをお願いした。本部が池袋に再移転してからは、同じフロアの理事長室にたびたびお邪魔して、菅野さんの意見を直接伺う機会も増えた。理事長室のデスクの周りにはいつも書籍が積まれ、「これ読んだ？」と1冊を抜き出し（私が読むような本？ から研究書まで何でも読んでおられた）、未読の本については内容を抜書きした読書ノートを渡してくれた。「これはすごいよ」と薦められ、私が興味なく応え、「ガクーン」と大げさに首を垂れるしぐさをされた。歳の離れた兄のような感覚で話せる人だった。

協同総研を立ち上げ、育ててきた菅野さんは、会員・非会員に関わらず、また研究者であれ実践家であれ、こだわらず幅広い人たちとの交流をした人でもあったと思う。その研究は常に労協運動に、そして社会の発展に寄与するものを求めておられた。だから、研究のための研究や、高みから分析するだけの人に対しては、時に厳しく批判もされた。

2005年の秋にイタリア、エミリア・ロマ

ーニャ州の調査を行った際に、菅野団長の下、私が事務局として10日間ほどの調査に同行し、菅野さんの人柄により深く接することができた。菅野さん自身23年ぶりという訪伊で興奮されていたこともあると思うが、レガを始めとする協同組合の方々や風土・文化に触れ、「残りの人生はイタリアの協同組合研究に」と、決意を語られていたことが思い出される。バルベリーニICA会長の新著を贈呈され、「翻訳するんだ」と意気込んでおられたが、おそらく帰国後の忙しさの中で成し遂げられぬまま逝ってしまわれた。

法制化が目前に迫るこの時期に、菅野さんがいないのは残念でならない。もう一度、思う存分イタリアの研究や障害者就労の研究をしていただきたかった。私が今、菅野さんが初代専務理事を務められた船橋事業団に籍を置いているのも何かの縁かもしれない。菅野さんにはかなわないだろうが、私も本を読み、情熱を持って生きてゆきたいと思う。

精神障がいの方との協同労働の実現を

山下 和子 (NPO 法人わくわくかん事務局長/会員)

菅野さんとの出会いは、平成14年。かれこれ6年になります。その当時、当NPO法人は、東京北区より主に精神障がいの方

を対象に、就労面と生活面の支援を行う「就労支援センター北」の委託を受け、障がい者就労の推進のため、運営委員会設置の必

追悼 菅野正純さん

要性がありました。そこで、現運営委員長の齋藤縣三氏（NPO「共同連」事務局長）の推薦により、初めてお声掛けをさせていただきました。日本労働者協同組合連合会の理事長という多忙な状況にも関わらず、『労協が本当は力を入れていかなければならない分野である』と、運営委員に快く就任して下さったことが、鮮明に思い出されます。

菅野さんとの出会いにより、平成 15 年 1 月、精神障がいの方が「障がいや病気の経験を生かし」、高齢者や障がいの方のよき共感者として働くことを目的にヘルパー資格取得講座（北区社会福祉協議会の助成）を、労協センター事業団の全面的な協力のもと実施する事ができました。修了式には応援メッセージを頂き、地域福祉事業所で 3 名の精神障がいの方が、ヘルパー業務に従事させていただきました。その後も、精神障がいの方の、障がい受容とリカバリー（回復）の役割を持つ重要な就労支援プログラムと

してヘルパー資格取得講座を継続し、実施することが出来ています（7 回実施。約 50 の修了生の内、半数が介護業務に従事）。平成 17 年 8 月にはピアヘルパー（障がい当事者のヘルパー）の所属するヘルパーステーションも立ち上げることが出来ました。

なお、平成 18 年からは、当法人の理事として運営にも関わっていただき「これから」というときに残念な思いで一杯です。大会では、菅野さんを始めとし「人の命とくらし」「人間らしい労働」と働くことの原点に戻るような力強い言葉を数多く聞くことができました。まさに、協同労働の協同組合の理念こそ、企業就労で疲れ、あるいは病んでしまった精神障がいの方の、新たな働き方の指標となるものと大いなる期待しております。菅野さんの志を、是非、協同労働の視点から障害者福祉と言う特異な分野に持ち込んでいただける事を心待ちにしております。

菅野 正純さん追悼

太田 武二（新運転東京地本書記長/会員）

今日、フロリダで逝去した 84 歳の叔母のお葬式から帰ってきたばかりで、協同総研の郵便物を開けて、菅野さんの逝去を知りました。それも、私の 59 歳の誕生日に亡くなったなんて！

菅野さんにはじめてお会いしたのは、十

条の事務所でした。2000 年の秋ごろ、私が新運転東京地本の高齢者等特別対策事業部の部長になって、高齢者を中心に介護移送サービスの事業起こしの企画を相談に行った時でした。

そのとき以来、協同総研の機関紙や日本

労協新聞紙上での論文、報告などを読ませていただきました。そして、アフガンからイラクへの侵略戦争に反対する集会などで良くお会いしたものでした。

昨年倒れられて以降は、労協新聞で回復している様子が報じられていただけに、今回の突然の悲報に驚き、深い悲しみを覚えています。

何よりも、菅野さんが望んで止まなかった「協同労働の協同組合法」が大きく成立に向けて前進してきた最中の逝去というこ

とで、ご本人の悔しさを想像すると、居たたまれない気持ちになります。

それだけに、法律制定に向けての努力をより一層強めると共に、違法派遣、請負が蔓延し、新自由主義経済とマネーゲームが破綻しようとしている局面を私たちの闘いで打開するために、協同労働の現場を拡大していく決意を、菅野さんにお誓いするものです。

2008年1月29日

菅野さんとの長いお付き合い

小池 喜和三 ((企) 雷設計コープ/会員)

菅野正純さんの追悼文を書くとは、思いもよらないことになってしまいました。

菅野さんとはもう長い付き合いで、出会いはお互い学生で私が23歳の時でした。その後、社会人となり、私が全日自労・建設一般という労働組合の活動をしている時、菅野さんが常勤として同じ組合に入ってきて、話をしたのを覚えています。事業団の取り組みが担当でした。

昨年秋、リハビリテーション病院にお見舞いに行った時、体の回復が順調で、もう少し経てば元のように元気になるように見えました。末っ子の娘さんがお父さんに寄り添うように介護をされていて、さらに回復が早まるだろうと思ったものです。その後、

手術が思うように行かず厳しい状態となりましたが、菅野さんの握る手に力強さを感じていました。

菅野さんとのことで思い出深いのは、埼玉県鳩ヶ谷市にある菅野さんの生まれ育った実家でのことです。今から4年前の暮れ、病氣療養中のお父上を在宅で介護しようということで、家族ぐるみで取り組んでいました。菅野さんから療養室の模様替えでの事で声を掛けていただき、私もその中に加わらせていただきました。

やさしく、しっかりしたお母上と、菅野さんとのお互い自立したように見えた関係が新鮮でした。書庫を造り、本棚に書籍を積んでも、積んでも、さらに菅野さんのダン

ボールに詰まった本が運び込まれ、それを静かに見守る母の姿、といったところにも感じました。

日曜日に内装工事の関係でお邪魔すると、時に菅野さんが居られて、仕事の後酒を出していただきました。家族のことや労協のこと、友人のことなどゆったりと話をし、「俺はあまり外では飲まないんだけどね」と言いながら、意外と飲みっぷりが良かったように覚えています。「明日は会議があるので、理事長としての発言準備にこれから

十分な時間を掛けるんだ」と帰り際に聞いた時は、静かな強い意志を感じました。

お父上の在宅介護がその後しばらく続き、お母上の自転車による交通事故なども重なり、業務と併せてきつい日々が続いたことと思います。労協の目的や理念と併せるようにして過ごしていたものと推測していました。

1年に及ぶ長く厳しい闘病生活を、何とか元気に戻ることによって終わらせてほしかったと思うこのごろです。

日本労働者協同組合連合会 前理事長 菅野正純氏に憶う

武市 蕭（生活協同組合東京高齢協監事）

菅野理事長を憶う時、私には『協同組合社会主義論大内力語録』大内力著、武市蕭編出版に対しての助言でありました。

最初、私がワープロで打ち込み、大内先生が赤文字で添削及び加筆した原稿を菅野理事長見せると、約90頁に亘るその原稿を暫く眺めてから、一言『すごい原稿だね』と、だれに言うともなく彼は呟いた。そして、「全面的に協力するから、ぜひこれは本にしてほしい」と、話されました。加えて、「この原稿は武市さんの宝だね」とも話されました。この励ましを受けて、2005年9月26日に、11月にはこの本が出来上がる

旨を伝えると大変お喜びになり、私と出版会社こぶし書房社長西川氏に対し、センター事業団理事長永戸祐三氏と共に、発行全部数買取りを約束してくれました。また、出版記念パーティーの計画も提案していただきました。

その上、2005年12月15日付労協新聞に於いては、協同組合の根源的な再生、未来社会の方向を示すとして、『協同組合社会主義論大内力語録』を評価してくれました。

去る1月13日、偶々、労協中川宗一郎参与と打ち合わせの電話をしていたところ、貴殿の訃報を聞き、昨年来、入院して、大

分よくなりつつあることも聞いておりましたのに、突然の連絡で愕然と致しました。

貴殿は、何時も篤実な博聞強記（はくぶんきょうぎ）を意中に務めて努力していたことは、明瞭でありました。今後、残され

た我々は、貴殿の功績を基に協同組合の発展のため、努力していきます。どうか安らかにお眠りください。

合掌

2008年1月30日

菅野さんとの出会からその後 40 年

磯部 武（元センター事業団/会員）

私と菅野さんとの出会は、今から 40 年ぐらい前だったと思う。全日自労の本部、本部の組合事務所で、神奈川の幹部から「あの机の前に座っているのが例の菅野君だよ」と教えてもらったのが最初の出会いでした。

大学を出てすぐ書記で入ったそうです。その当時は、私は、いたく感動もし、おどろきもしました。

小柄だが可愛くて、しかしどっしり見えて頼もしく、その勇気ある行動に打たれました。その記憶が今も残っています。その後約 40 年、その間理事長の指導のもと、私は菅野さんと労協の法制化のために一緒に国会工作に共に参加したり、総代会や諸々の諸会議、学習会等で多くを教えてくださいました。私だけではなく、多くの事業団員、組合員が励まされ、導かれ、そし

てセンター事業団 20 周年、事業高 110 億組合員（3,000 人）、就労者（4,000 人）という大きな成果に到達しました。センター事業団は、大きな任務、知的センターとしての役割を果たしつつ、20 周年を迎えたのです。総研の研究誌に、その輝かしい足跡を数多くの論文や報告、問題提起等、労協の発展の基礎を見事に日本に築くことができました。

菅野さん！ありがとうございます。永い間ほんとうにご苦労様でした。

菅野さんの教訓、労協運動に残してくれた多くの財産や宝を生かし、21 世紀に平和で明るい協同労働に依る心豊かな世界をめざして、皆さんと共に私も命ある限り協同労働に依る協同組合の発展のため頑張りたいと思います。

菅野さん安らかに眠ってください。合掌

菅野正純さんを偲んで

中田 宗一郎（日本労協連参与/会員）

菅野正純さん、貴方は、何でそんなに死に急いだのですか。

永戸祐三労協連理事長の後を継いで、理事長を引き受けてからの周囲への気の使い方には、昔を知る者として「柄に無いことをやり過ぎる、大丈夫か」と思ってきたが、早いもので、大役の解放を間近にして、次なる課題を「障がい者問題」と「環境問題」（簡単なテーマでないのに）に定め始めた頃から戻ってきた迫力の回復と、経験を自信に変えた姿を喜んでいたのに、突然の事故には「なんて、残酷な！」と声も無かった。

私が、日製闘争を経て市民立病院建設運動での失敗に疲れ果て、救われるように辿り着いた事業団運動で出会った学生運動の闘士たちの中で、菅野正純さんとの友誼は鮮烈であった。

貴方がそっと配り続けてくれた、勉強ノートにどれほど助けられたらうか。感想を伝たり質問をすると、2倍3倍のノートが届けられることが少なくなかった。貴方の業績で、強い記憶を上げると、

①高齢協構想原案の起草と節目での総括論文。

②プランディーニ・ベーク氏の論文や報告の翻訳。

③「協同労働」の発見。

④対談やシンポでの名司会。

以上を挙げたい。

特に、私のこだわりであった「労協経営」追求が頓挫しかった時期に、再挑戦を決意する論文を探しにくれたことを深く感謝している。

その上で、改めて思うのは、労協運動をすすめる上でのグローバルな情勢分析を、日本の協同組合運動再生との関連で、国際的な動向をいち早く取り込んで、総会報告や諸論文で展開し続けてきたこと。「学者」になってもおかしくない人材なのに、実は徹底して現場にこだわった、文字どおり国際連帯を実践し続けた男だったと言いたい。ICAのバルベリーニ会長が再三訪日してくれたこと一つ取っても、そのことを語って余りある。

欲を言えば、車椅子に乗ってでも、元気になって、第一線に返ってきて欲しかった。それも適わぬことになったが、貴方を知る仲間が、貴方が労協運動に託した思いと貢献を語り継ぐこと、貴方を超える情熱を持って活動と勉強に励む若者を育ててくれるだろう。

安らかに眠って下さい。本当に、ご苦勞様でした。
2008年2月18日

国際的分野での先見的活躍

田村 守保（日本労協連参与/会員）

「協同労働の協同組合法」制定が現実のものとなろうとし、労働者協同組合が、ひいては協同組合全体が画期を迎えているその時に、法制定の運動の中心であり、分けても理論的な分野で枢要な役割を果たしていた菅野正純さんが亡くなったことは、今後の労協運動の事業・運動にとって大きな痛手である。

菅野さんは、労協運動に高い理念を見出し、それを国内外に発信し、発展させていった。“理念のお化け”とまで言われるくらいに、徹底的に追求する姿勢は命を懸けているようにも見えた。

菅野さんの足跡に全て触れる訳にはいかないが、菅野さんは早くから協同労働の新しい可能性、労働者協同組合法制定の理念・意義・目的について、国際組織であるICA（国際協同組合同盟）やILO（国際労働機構）との関連も踏まえて、理論と実践の両面からリードしていた。1999年にカナダのケベックで開かれたICA大会に参加した菅野さんは、大会の感想を「多国籍企業に富が集中していくもとで、失業や貧困、それが犯罪やテロを生み出し、民主主義を危機に陥れている。これに対して社会的な公正と経済的な効率性を兼ね備えた、組合員自身が出資し主権者として経営を行って

いく協同組合こそこの状況に対応する根本的なオルタナティブを提起できる」と述べている。

菅野さんのILOを舞台とした活躍は特筆に価するし、これが法制定に大きなインパクトを与えたにちがいない。2002年6月に開かれたILO第90回総会において、「協同組合の促進に関する勧告（2002）」が提出され、政・労・使という三者構成の中で、複雑な討議を経て、圧倒的多数で採択されたという。1966年の「協同組合（発展途上国）に関する勧告」を全面的に改定し、協同組合が途上国だけでなく発達した資本主義国を含め全世界的に意義あるものとして、促進することを明らかにした歴史的な勧告といわれている。これに向けて、菅野さんが中心となり、協同組合学会のシンポジウムなどでの勧告案討議、意見書の作成、ICAの修正案づくりへの参加など積極的な取り組みを進め、総会においてもICAや各国代表と連携をとりながら修正案採択に力を尽くした。

勧告について、菅野さんはその報告のなかで「第1の核心は『ディーセントワーク』（尊厳ある労働・まともな労働）を焦点に、現代世界における協同組合の不可欠の役割が、国際公共政策の場において承認された。

第2の核心は、世界の9億人の協同組合人が草の根からつくりあげてきた、ICAの定義・価値・原則が、国際的な公共政策の基準として確定されるとともに、協同組合がより大きく、『社会的経済セクター』の広がりなかに位置づけられた。第3の核心は、協同組合と組合員、働く人びとと市民の主体形成、自立支援を基調とする、協同組合促進政策が具体的な形で示された。第4の核心は、働く人びとの権利の現代的な擁護と発展にかかわって、労働組合と協同組合

の歴史的な再合流が促された。

協同組合促進勧告は、協同組合と政府の関係のみならず、労働運動と協同組合運動総体との歴史的な関係と、それぞれのあり方を根底から問い直し、21世紀の新たな政治経済社会像の構築を私たちに迫っているように思えてならない」と述べている。

菅野さんの国際分野での活躍はこれにとどまるものではないが、特に印象に強く残った足跡に触れて、菅野さんを偲ぶ一文とします。

追悼 菅野正純様

鈴木 晴彦（日本労協連理事/会員）

菅野さん！ 本当に無念でしょうが、あなたの思いはしっかりと労協に受け継がれています。ささやかですが、そのことはご安心下さい。娘さんが、明日から労協で働くことになりました。あなたの意志を継いでご活躍されることと思います。私たちもそのために全面的に応援します。

私とあなたとの関係は、深いものではありませんが、多くの示唆を受けました。田村さんと、業務委託について「忸怩たるものがある」と話していたとき、明快に、それを進める団体の主体性が問題だと指摘されました。それだけでなく、労協運動に果たした理論的な貢献は計り知れません。

また、障害者就労の実践は、私の目を開

かせてくれました。最初は、「理事長が頑張っているから」というスタンスでしたが、今では、私の生き甲斐になっています。

指摘されたように障害者の就労にとって、労働者協同組合は、呪文を解くように明快な回答です。今、それが制度的にも実現されようとしています。

そのことが現実化していることをご報告し、その実現のために全力を尽くすことをお約束いたします。障害者も私たちと同じ人間です。この人達の幸せが実現できなくて、働く者の幸せもありません。あなたの意志を継いで、障害者が、健常者と同じ様に働ける社会の実現を目指して全力を上げます。どうか安らかに眠りください。

今度の便りは、「協同労働の協同組合法」が実現できたということであるように全力

を上げます。

追悼 菅野正純様

鈴木 剛（日本労協連理事/会員）

自分の言動が他者を斬りつけたとき、本心が他者から誤解されたとき、闘おうとする意志は力なく挫けてしまいます。そんなとき菅野さんは、いつだって優しい目をして、私の肩を叩き、「最近の鈴木の一取り組みを聞かせてくれよ」「この本の感想を聞かせてくれよ」と言いながら、いつもの蕎麦屋に誘ってくれたのでした。

菅野さんは、自らの痛みとして、戦争や搾取や差別を憎んでいました。私が、つたない反戦運動を立ち上げたときも、熱い連帯のメッセージを寄せていただきました。障がいがある仲間たちや過疎地での仕事おこしに際しては、いの一に現地を訪れて、激励していただき、取り組みの支えになっていただきました。

私に子供が産まれたとき、とても嬉しそうに、少し照れながら、ご自身の家族や仲間のことを語ってくれました。

お見舞いのときに、私と目があうやいなや、「鈴木剛、剛情の剛」と書いて見せて、ニヤリとされました。

こうして思い出してみると、いつだって菅野さんの言葉は透き通っていました。人間の生き死ににかかわる原理、未知の存在、敵対する概念について、決して表面的な印象からではなく、純粋な姿勢でもって内在的な論理を掴もうとされていたことを思い起こします。そして、その目はいつだって優しくかった。

本日、永訣のとき、立ち止まり、あなたのことを思い出し、また歩いてゆきます。

菅野正純さんの逝去に思う

長谷川 勝彦（あいち労働協同事業団理事長/日本労協連理事）

2002年7月に2回、8月に1回、朝日新

聞による愛知県高齢者就労事業団「バッシ

ング」があった。名古屋市議会で公明党に質問され、いままでの事業団に対する評価を一変し、事業団切り捨て路線に転換した。

この問題に対して、日本労協連合会は、菅野理事長を先頭に高齢者事業団に対し原則的適切な提案をした。

この提案の内容は次の通りですが、これは地域労協で問題が起きたとき解決のために参考となるものです。1.当面の焦点と現状打開の要点を明確にする。2.焦点と打開の要点を現実化するための基本問題。3.基本問題から派生する課題と意見の相違をいかに解決するか。提案の中心を貫いているものは、事業団の未来は団員自身が決める。事業団の果たしてきた社会的役割、あいち労協、高齢者生協、社会福祉法人を生み出したことなど自治体との間できっちりと議論する。三役を含め全団員の確信とする。

菅野氏は、この提案に基づいて、2回、

高齢者事業団の三役に心を込めて説得しました。

しかし、三役はかたくなに拒みました。「いま市当局と闘うと、今後仕事を何もくれなくなる。連合会は一切この問題に口を出さないでくれ」というのみであった。

私も同席していましたが、菅野氏の残念、さびしそうな顔をいまでも忘れることはできない。

日本労協連の理論的中心であり、「事業団」から「協同労働の協同組合」と実践から理論付け、2008年は、法制化をまさに実現しようとしているとき、そこに理論的にも、実践的にも大きな役割を果たしてきた菅野氏がいないことに、痛恨の思いがある。私たちは、法制化を実現し、法の精神を生かした労協の実体をつくることにより、菅野氏に喜んでいただきたい。私たちを愛をもって見守ってください。

菅野さんを偲んで

小澤 房生 (NPO 法人ワーカーズコープかがやき/会員)

今年も早くも節分になり、光陰矢の如しを実感します。今日は、低気圧が列島の太平洋側を通過し、北に寒気団という冬型のため、東京で大雪になっています。信州からいう「かみ雪」、そんな東京に、菅野さんはもういない。

昨年2月24日に倒れられて、まだ1年

も経たないのに、この間、貴方とご家族の皆さんのたたかいも甲斐なく、逝ってしまいました。誠に残念でなりません。菅野さんは、今日の協同労働の協同組合の内実をつくり、法制化に向けて実践の理論化と道筋をつくるうえに大きな役割を果たされました。

私は、長野県中高年雇用福祉事業団の創立に関わって3年ぐらい経った1983年ころ、いわゆるレイドロー報告に出会い、「目から鱗」を感じ、事業団運動に確信を持ちました。そんな時期に、イタリア協同組合・イギリス労働者協同組合の調査活動を行われた菅野さんから、スペインを含む東欧の労働者協同組合の理論と実践を紹介していただきました。原語をわかりやすく翻訳されたことにも感服していました。

事業団から労協へ質的転換し、労協が社会的協同組合として発展する萌芽期ともいうべき大事な時期に理論的指導者として、国際的教訓から多くを学ばれ、創造的に役割を果たされました。

非営利・協同のセクターによる新しい福祉社会をめざして、1987年7月、伊東での「いま「協同」を問うプレ集会」について、「これは、さまざまな意味で日本の民衆運動のなかに、新しい風を吹き込むものであった」と評価されています。この第1回協同集会後、継続して全国的に発展すると同時に、私たち長野県では、非営利・協同の懇談会がつくられて、5回にわたる「考

えてみよう長野県の協同を」と協同集会を開くことができました。菅野さんは、1989年の第2回全国協同集会では総合司会者を務められ、その後の「協同集会」「協同総合研究所の設立」と、その才覚をもって立派に歴史的任務を果たされました。「協同の時代」を示唆されて、展望を持った貴方の理論と実践に、哀心より敬意と感謝の念をもつものです。

私は、1994年から2年余、労協連本部におりました。当時本部は、池袋の雑司ヶ谷にありました。私の生活は鬼子母神の境内を通った近くのアパートでの自炊生活。菅野さんは、高田馬場の協同総合研究所に常駐されていて、一杯飲む機会が、時々ありましたが、いまはその頃のことがたいそう懐かしく思い出されます。

58歳という若さで、志なかばにして逝かれた菅野さん。「千の風」になって、いつまでも私たちを見守っていてください。菅野さんのご遺志を継いで、一層、頑張る決意です。

安らかに眠りください。

2008年2月3日 合掌

菅野正純さん追悼

松沢 常夫（労協新聞編集長/会員）

正月5日、労協連の古谷理事長、林多恵子さんと菅野さんのマンションを訪ね、お

見舞いしたばかりだった。次のリハビリ先は、長野高齢協との関係もある鹿教湯病院

をお願いしたら、などと奥さんと話し合っていたのに、その直後にこんなことになるうとは…。

10年前、私も「あと一週間遅ければ劇症肝炎になって間違いなく死んでいた」という体験をしている。永戸さんに「目が真っ黄色だぞ、すぐ病院に行け」と言われ、命を救われたが、あの教訓を生かしていれば、去年の「事故」は防げたかもしれない。今更どうにもならないが、いろんな兆候が出ていたのに、脳の異変とは露ほども考えようとせず、「最近はみんなと飲みにもいかない。冷たい、理事長としてどうなのか」というような目で見てしまっていた。申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

全日自労の書記という点では私の方が先輩だが、事業団＝労協では菅野さんが先輩だった。当時、事務所の掃除は2人組みで交替でやっていた。彼は隅から隅まで本当にていねいに拭いていった。モップの絞り方も彼から教わった。

彼は、何事にも関わったら曖昧にすることはできない人間だった。ほんの10分の挨拶をするのでも、記念講演をする方の著作を朝まで読み続け、ノートをつくってから話していた。

みんなが飲みに誘っても、明日がヘルパー講座の特別講座だと断る。「私はこうしないと話せない」と言って、何冊かの新しい文献を読み込んでから講義をする。

一途なだけに、人との関係には冷や冷やさせられる面もあったが、そこが持ち味だった。昼はずっと“そば”。毎日同じお店。

ところが、気の利かないお婆さんになったとかで、別のそば屋に切り替え、二度と行かなくなる。

著書に共感していた人とある会合で出会い、喜々としてあいさつに行ったが、まもなくプンプンして帰ってきた。その人が、労協の事実を知ろうともせずに批判した、というのだ。20数年前のことだが、舟六という小さな飲み屋で、隣りに座った中年おやじと言ひ合いになった。「表に出ろ！」と啖呵を切り、「お前だけな」と付け加えた。

ところで、菅野さんはコツコツ翻訳をして本も出している。1992年10月に開かれたICA東京大会を前にして、その基調報告「変革期の世界における協同組合の価値」の要約（といっても200ページを超える）を出版したが、大会会場の廊下で原著者、スウェーデンのベークさんと会っても、あいさつをしようとしなない。「いいよ、いいよ」と尻込みする。

私の方は、ツーショットを新聞に載せたいただけなので、気分は楽だ。恥かしいとも思わず、ベークさんに翻訳本を見せ、「ジスブック、ユアレポート、ジャパニーズ、ヒイ、ライト」とか単語を並べて紹介すると、「オーツ」と満面の笑みを浮かべ、菅野さんとしっかり握手、2人でいろいろしゃべっていた。

もう1冊の方が、おそらく思い入れは深かったであろう。レガ（イタリアの全国協同組合・共済組合全国連盟）のブランディーニ会長が書き下ろした「協同組合論 イタリアの戦略」だ。出版は1985年5月。

中高年雇用・福祉事業団全国協議会の5周年記念で、日フィルがフルオーケストラで出演してくれた。まだ十数人しかいなかった若手の誰もが、手に手に刷り上ったばかりのこの本を掲げ、本当に自分たちの本だと、飛ぶようにして売り歩いていた。まだ事業団の一員でなかった私は、その姿をうらやましく眺めていた。

「イタリア語の知識もおぼつかない私が、妻子のまだ眠っている早朝、辞書を引き引き、書きためたものである。それは本書の魅力と、新しい運動のために苦闘するわが事業団の活動家諸君に理論的な武器を届けたいという情熱の結果であった」という「あとがき」に、彼の思いが凝縮されていた。

驚くことに、この本には今、法制化直前

の日本の労協運動が問われているテーマがそっくり含まれ、その解答や方向が明快に示されている。菅野さんが元気なら、鬼に金棒の法制化運動が展開できていくだろうにと残念でならない。

蛇足だが、この総会で、理事長の中西五洲さんが菅野さんの努力を絶賛しつつ、「トマトが破壊された」という訳はないだろう、と指摘していたが、収穫されたトマトが生産・出荷調整のため、「ブルドーザーのキャタピラの下で破壊された」というもので、怒りを込めた的確な表現だと思う。彼に伝えられなくなってからそんな評価をしても無意味だろうが、これらの労作を、今こそ、学び直さなければと思う。

追悼 菅野正純さん

川地 素叡（労協新聞編集部/会員）

2005年10月。11時間かけて「社会的協組合」の調査にイタリアへ向かう飛行機の中で、大部な本を開いて一心不乱に線を引きながら読んでいた菅野さんを想い出す。ひとねむりしてひとねむりして、眼を開くと、機内にまだ灯火が点いていて、やや猫背になって字を拾うように本を読んでいる菅野さんの姿を今でも思い出す。すごいなあと同時に、菅野さんの「学ぶということ」へのまっすぐな誠実さに心を打た

れた。

代表団（他3人）が訪問した先でも、「いままでいろんな団体や人が調査に来たが、話を聞いていだけで、実現に向かってやろうとした人はいなかった。バルベリーニ会長からも聞いている。プレジデント菅野なら実現するだろうと。本当に期待している。」と、行く先々で言われた。それだけに、菅野さんの訃報は、協同労働法制化を推進する労協だけでなく、イタリアやその他の

追悼 菅野正純さん

人たちにとっても大きな痛手だろうと思う。「いまこそ、先頭に立って欲しかった」と悔やみきれない。

ICAのバルベリー二会長の部屋で新著を渡されて、眼を輝かせて受け取った菅野さんが旅行中、しきりに「イタリアを徹底して深めたい、その研究をしたい」と言っていたのを思い出す。菅野さんの本当の気持ちだったのだろう。

社会的協同組合への印象(労協新聞 2006年1月15日号掲載)を「第一に力強い発展とその質を実感したと書き、社会的協同組合が自分たちがつくりだしている生産物を『関係財』(人と人との関係を豊かにし、その中で発展していく財)と規定しているのにびっくりし、それを『社会的バランスシート』にまとめられている。そのことは、市場原理主義とは異なる、人間の経済の姿をそこに見ることができる」と書いている。続いて、『『イタリアの協同組合運動』『協同組合システム』全体が経済・社会の変革者として本格的に登場している」とも書いている。

10日間に渡る調査の中から、そのことを

本質的に見抜き、熱い思いを持って日本に帰ってきた菅野さんに、今更望むべきもないだろうけれど、もっときちんと時間をかけて、そこに潜む日本変革の想いをつなぎ合わせる思考と方策を聞いておけば良かったと、今は思う。

何にもにつけて、まっすぐだった。その考え方が、時には走りすぎるように思えたが、時間が経ってみると、深くうなずけることが多かった。借りた本には、鉛筆で隙間なく線が引っ張ってあって、びっくりしたことがある。対談という比較的軽い本だったのに、菅野さんは、それさえも知識にして飲み込んでいたのかと思った。

食べるものも、ソバのみであったり、1日1万歩、本はとにかく買う(昼休みに本屋に行くとかたいい会う)ことであったり、長男で、お父さん・お母さんに人一倍強い愛情をもっていたように思えた。

昔、池袋の酒屋でアンダーシャツ一枚になりながら、永戸さんと激論していた姿も、今は懐かしく、悲しい。

2008年2月18日

追悼 菅野正純様

田中 羊子 (労協センター事業団専務理事/会員)

今になって、菅野さんがいなくなったことの重さが、実感となってズシンと響いて

います。

私は、20年前、知人に菅野さんを紹介さ

れ、労協に入りました。大学の先輩（田中秀樹さん、現在広島大学の先生です）が生協総研にいらして、就職浪人をしていた頃に相談に行ったときに、プランディーニの「協同組合論」を紹介されました。その訳者が菅野さんで、後書きのところに“夜はいつもお酒を飲むので、朝早く起きて勉強している”というところを読んでくれました。そのときに、「マイナーだけどおもしろい協同組合があるよ」と紹介されたのが、労協でした。

当時、私は大学で社会教育を学び、“人や地域に直接触れる中で、自分自身も成長できるような仕事がしたい”と思い、教員試験と公務員試験に落ち、農協、生協、医療生協の面接を受けたけれどピンと来ず、先輩に紹介されるまま、菅野さんを訪ねました。正式な面接はそこそこに、“でらちゃん”というワインの一升瓶から自分でグラスで注いで飲むラーメン屋さんに連れて行かれ、労協の話と、それ以上に永戸さんの学生運動時代の勇姿と、いかに尊敬するすごい人かを、酔っぱらいながら何時間も語ってくれたのが、私の面接でした。

労働の現場の自主管理と、働く人の主体形成を通じた社会変革への思いを熱く語られ、“自分は社会変革のために勉強しているので、詩は読むけれど小説は読んでいゝヒマはない”と言われていたのにはびっくりしました。でも、私が仕事に求めていたもの—働くことを中心軸に、人間同士が直接ぶつかり合い、深く関わり合う中で、主体者としての成長に価値を置く—ことが、ス

トレートにテーマにできることに、迷わず“ここだ”と思いました。心待ちにしていた返事が約束の日に来ず、がっかりしていた数日後に採用の返事が来てホッとしたのを思い出します。

それから2年位経った頃、飲んで終電がなくなり、同期だった田中義博君といっしょに、菅野さんの田町の家泊めていただきました。居間にピンクと水色の布団が並んで敷かれてあり、「お前たち、悪いことするなよ」と言い残して、自分は奥さんの膝枕で寝ていました。その横で娘のあきちゃんが、まだ小さいのに、菅野さんのような理路整然とした口調で、私たちにクイズを出して、その解答を教えてくれたのが印象に残っています。

本当に、大切に育てていただいたと、感謝の思いでいっぱいです。

先日、職業リハビリテーション学会でお話することになり、障がい者の就労支援を巡る菅野さんが書かれた文章やレジュメを集めて、読み返しました。

あらためて、その水準の高さと菅野さんの、このテーマへの思いの深さに感動しました。と同時に、菅野さんをなくしたことの重さをあらためて実感し、悲しくなりました。労協の中で、だれも変わることができない役割を果たされて来たのだと思いました。労協を愛し、社会変革にとっての価値を確信し、現場の仲間の実践に涙しながら感動し、だれよりも学び、理論の確立に全ての情熱を注がれて来たのだと思います。

亡くなられて、あらためてその果たされた役割と存在感に気づき、もっともっと話をし、菅野さんから学べばよかったと深く後悔しています。

今となっては遅いのですが、菅野さんが労協運動の中で書かれた論文や資料を、し

っかり整理してその成果をまとめ、私たちに残して頂いた、かけがえのない知的財産として、学び実践に生かし、継承していきたいと思います。

菅野さん、本当にありがとうございました。そして、これからも見守ってください。

菅野正純さん追悼

鈴木（旧姓 岩淵） 麻里子（じぎょうだん新聞、初代編集部員）

昨年 12 月の記念レセプションで、私はほぼ 20 年ぶりに“事業団”と再開しました。そのときに初めて、菅野さんが入院されりハビリ中であることを知りました。それから、まもなくの旧は訃報に言葉も告げませんでした。

1984 年～86 年頃に、20 代半ばだった私は、菅野さんから「じぎょうだん」新聞づくりを教わりました。

確か、菅野さんは、30 代後半だったでしょうか。豊島区雑司が谷の鬼子母神病院の 2 階に、ドッカと全日自労本部があり、3 階の一室に中高年雇用・福祉事業団全国協議会が入っていた頃です。

私は、この文章を書く前に、しまいこんでいた当時の“自労手帳”をひっぱり出してみました。ページをめくると、編集会議・取材・提稿・校正・発送の書き込みが、繰り返し出てきます。

当時の私は、こんな新聞をつくりたいと

いう意欲ばかりで、経験や実力が伴っていない未熟者でした。その上に、締め切りが守れないことも一度や二度ではなく、菅野さんの胃をキリキリさせたことが数えられない程あります。

「あなたより、おばちゃんのほうが、うんと良い仕事をする」と叱責されたことは、今でも苦い思い出です。

また、ある時、欠勤理由を説明しようとした私は、いきなり「失恋しそうです！」と本当の理由を口走ってしまったことがあります。

「何を言っているのか」と軽蔑されるのを覚悟していたのですが、菅野さんは「それは重要なことだ」と言ってくれました。意外でした。忘れません。

「レイドロー報告」に「すごい!」「すごい!」と感動しまくっていた菅野さん。

イタリアの労働者協同組合の視察研修から喜々として帰り、恐いぐらいの集中力で、

連日、レポート原稿を書き続けていた菅野さん。

私の反応が鈍かったりすると、いつも「ガクッ！」とオーバーアクションをしてみせた菅野さん。

菅野さんの隣の机で、新聞づくりと格闘

した日々は、私にとって短くも濃い日々です。ありがとうございました。

菅野さんがまとめあげた数々の文章は、労働者協同組合の一員として生きていこうとする若者に読み継がれ、生き続けるのだと、今、思えます。

菅野正純 日本労協連前理事長を偲んで

小林 裕子（センター事業団東京事業本部/会員）

私は東京事業本部に異動になるまでは、労協連合会に 13 年間おりました。菅野さんとも丸 6 年間一緒に仕事させてもらいました。その間のさまざまな光景が走馬灯のように過ぎていきます。

なかでも、いちばん忘れられないのが、菅野さんが労協の中で始めて「協同労働」という言葉を発したときでした。大塚の労働会館の 4 階の小会議室でした。法制化の議論を始めるときに、「われわれの労働は協同労働という言葉で定義できると思う」とおっしゃいました。初めて聞いた「協同労働」という言葉が私にはよく理解できなくて、働く人たちが職場の中で協同するというふうに考えればいいのかと思いました。協同して労働するから、協同労働なのか？ と。ところが、「そうじゃないんだ、自分たちが協同するのは当たり前だろう。利用者や家族と協同して、地域とも協同する。そして、その協同の関係を地域に広げ

ていくことが協同労働なんだ。コミュニティケアというのもそういうことじゃないか」とおっしゃられました。

当時の私の仕事は、もっぱら事務所の中で総務と経理の仕事が中心だったので、協同労働がなかなか実感できませんでした。ところが、菅野さんが労協新聞の縮刷版の中から協同労働の事実を全国の実践から拾い上げて、書き出されたものを読んで感じたことを思い出します。また、菅野さんとはとにかく本を読むのが早く、読んでおられた冊数も半端ではないのですが、読まれた本はすぐに内容を要約して配ってくださいました。ですから、私たちは本を読まなくても菅野さんの要約版を読んでその本を読んだ気になっていました。

また、菅野さんは労協新聞を毎回すぐに読まれるのですが、毎年の総会の前には必ず労協新聞縮刷版を 1 年分もう一度全て読み返して、総括されていました。

いちばん驚いたのは、最初に倒れられて、日赤で手術をされ奇跡的に助かった後、お見舞いに行ったのですが、そのとき傍らにいつも付き添って看病されていたお嬢さんの晶子さんから「お父さんは少しよくなって筆談で会話できるようになりました」といって大学ノートを見せてくれたのですが、そんな状態にあってもノートに最初に書いた言葉は『労協、協同組合、協同労働』といったことでした。

か弱い字で書いてあるので読むのも一苦労でしたが、本当にご自分の人生すべてを労働者協同組合にかけておられたのだと、あらためて尊敬しました。晶子さんが「お父さん私が誰だかわかる？ ここはどこだかわかる？」と質問したら、ノートに英語で『I'm in hospital』と書かれたそうです。その時、ああもう大丈夫だと思いました。次にお見舞いに伺ったときも、秋刀魚の塩焼きが食べたいとか、焼酎が飲みたいとか筆談されていて、七輪で魚が焼けている絵まで描かれていました。

本当にまじめで、熱心で、純粋な方でした。血圧が高いからと毎日手前の駅で降りて歩いて、大塚の事務所まで来られ、お昼

には「冠着（かむりき）」などの蕎麦屋さんで日本そばを食べるという習慣を崩されませんでした。

兎にも角にも、あのケアワーカー集会の日になぜ倒れられたのか？ そして、手術の後竹内孝仁先生の紹介で初台のリハビリテーション専門の病院に入られてからは、日に日に回復されてもう普通の生活に戻れるときと誰もが確信していたのに、日赤で再手術をして何で急に悪くなってしまったのか？ 年末年始を自宅で元気に過ごされ順天堂に転院して、明日手術というときになんで急変して亡くなられてしまったのか？ 本当にわからないことだらけです。奥様やご家族の方はさぞかしご無念だったと思います。

心からご冥福をお祈りいたします。

残された私たちにできる最高の弔いは、これから菅野さんの意思を継いで、協同労働の実践をたくさんつくっていくことだと思います。志半ばにして亡くなられた菅野さんに、私たちの決意表明を送りたいと思います。

「協同労働の協同組合」法制化に向けて後一步です。頑張りましょう。

追悼 菅野正純理事長

渡辺 哲（労協センター事業団東葛事業所/会員）

菅野さんが亡くなったという知らせを聞

いたとき、私は「まさかそんなことが」と

思いました。時間はかかるけれど、いつかまた復帰して活躍して下さると信じていました。

私が以前、群馬事業所にいたとき、清掃現場での障害者就労支援の取り組みをやっていて、群馬県障害者雇用促進協会主催の職域開発援助事業推進協議会で、県下の事業所の中から2つの典型事例のうちの1つとして選ばれ、報告を行い、そのことを労協新聞で取り上げてもらいました。

菅野さんはそれで私のことを知ったのか、私が連合会の会議に出ているときに「渡辺さんの取り組みをもっと聞かせてくださいよ」と声をかけてくれました。

また、雇用能力開発機構の職業訓練講座を行ったとき、「協同労働の協同組合」についての科目で、講師としてきていただきました。

以前、一時金の申請の時、地域での事業拡大などいろいろ成果があったのですが、経営数値がガイドラインに届かず、結局一時金が支給されなかったことがありました。

私は「組合員はみんながんばったのだから何とかならないか」と事業本部に掛け合

ったのですが、事業本部の方もがんばりは評価してくれて、センター事業団群馬事業所、群馬事業団、群馬高齢協共催の「1・2・3 運動群馬大決起集会」で、菅野連合会理事長が記念講演会をやってくれました。そのとき、連合会やセンター本部などから何人かの人に来て、私が前橋駅まで車で迎えに行ったのですが、私の小さな車の後部座席に菅野理事長をギュウギュウに押し込んでしまったことを思い出します。

「協同労働の協同組合法」の制定前夜という今、なぜ菅野さんは亡くなってしまったのか、という思いでいっぱいです。法制化の中心になって永年努力されてきた人がその成果が現実のものになったときにそれを見ることができないという現実、とてもつらく悲しい思いをしています。

菅野さんのやりたかったことの一部でも、これからやり遂げていくことが菅野さんへのいちばんの追悼と思い、がんばっていきたいと思います。

2008年1月30日

労協が「協同労働の協同組合」として世界に発信し、市民主体の協同組合運動と社会改革の旗手として、地球規模で行動する

相良 孝雄（労協センター事業団甲信特区事務局長/会員）

私が労協センター事業団に入団した

2005年の秋に、菅野さんを先頭に、当時の

追悼 菅野正純さん

協同総研事務局長の菊池さん、労協新聞の川地さんとイタリア社会的協同組合の訪問研修に参加させていただきました。

このとき菅野さんが「レッジョエミリア・ロマーニャ州」との懇談の中で、「協同組合は社会的財産」と話す担当部長の話を聞いて、「日本もそのようになれる波をつくりたい」と話し、熱心に現在の日本の労働者協同組合運動や法制度について語る菅野さんを見て、「情熱」と「愛」をこの労働者協同組合運動に捧げていると強く感じました。

また、本部に来たときに、菅野さんとお話をする機会が多くあり、協同組合や社会的企業、非営利・協同セクターの本などを多く紹介していただき、私に以下の話をいただきました。「いくつになっても、協同組合運動への想いを抱いている。歳をとっても今からでも2年～3年ほど、イタリアに行って研究ができればおもしろいね。特に、イタリア、レガコープの社会的協同組合の運動についての歴史と社会的な意味を考えたい。ノーマライズされた社会的コミュニティをつくるために協同組合を学びたい」と、いきいきと語られていました。

また、私に対して「相良くんは、大学時代から協同組合の実践と研究をしている。若い人にとって、協同組合の理念に触れた上で仕事をしたいということはまだまだ少ない。その意味でも、労協や協同組合運動全体に対して、「協同組合の意味や価値」を同世代の人に話してほしい。若い人にとって労協で働くことはまだまだ困難さがある。

しかし、先人の仲間が苦勞して現在までの実践を切り開いてきた。相良くんはまだまだ若い。日本だけではなく、世界から、そして日々の実践からも多く学び、考え、仲間とともに頑張ってもらいたい」という温かいお言葉をいただきました。

子育て現場から労協全体に広がった「3つの協同」の理念を実践として、記録として初めて行った現場が立川児童館であり、私の初めての現場でした。その「3つの協同」も菅野さんを中心にしてまとめた「新7つの原則」の「定義」がなければ意味を持たなかったものになっています。その意味でも「理念があったからこそここまで労協が成長をした」と考えています。

「生協のギョーザ薬物混入事件」から、主要な協同組合組織が市場化の流れに流されている昨今、私は菅野さんの意志を継ぎ、上記のタイトルのように「協同組合」の「原則」、「理念」、「実践」を世界の協同組合関係者や市民セクターの仲間に伝えたいと思います。そのようなこともあり、ICA 本体に関わってみたい夢が広がっています。菅野さんに「いつ勉強されているのですか」と話すと、「朝4時～5時に起きてやっている」とのことでした。まだまだ私は勉強不足の感も否めませんが、夢の実現のために、現段階でTOEICの勉強を始めました。

「もっと菅野さんの話から学びたかった」「なぜ今、逝ってしまうのか」と嘆くばかりになりますが、「私の生き方」を変えてくれた菅野さんに感謝します。本当にありがとうございました。

追悼 菅野正純様

城戸 愛子（労協センター事業団総務経理部/会員）

私はセンター事業団に新卒で入って 18 年になります。9 年前に本部総務部に異動になり、菅野さんとも日常的に接することになりました。

2002 年から、センター事業団の内部月刊誌「月間情報誌」の担当となったこともあって、原稿依頼もすることになりました。総務部の業務と兼任だったため、企画がギリギリに決まり、原稿依頼をして 1 週間で書いてください！という無茶なお願いもよくしました。理事長室に「お願いが・・・」と入って行くと「今度は何？」と言いつつも、いつも締め切りを守って原稿をいただくことができました。

時に、こちらでお願いするテーマでは気に入らず、「こういうテーマはどう？」と提案されることもあり、こちらの反応がいまいちだと「ちゃんと勉強しなさいね」と、それでも厳しくではなく、優しく言われるところが菅野さんだなあといつも思っていました。

しかし、いちばん大きな思い出というか多大なご迷惑をかけたのは、私が泥酔したところを介抱してもらったことでしょうか。めったに一緒に飲みに行く機会もなかったのに、5～6 年くらい前のセンター事業団・連合会の合同の歓送迎会で、一次会で既に酔っ払い、二次会へ移動した記憶もないのに、なぜカラオケ屋にいて、途切れ途切れの記憶中では、ひたすら菅野さんに介抱してもらったようです。菅野さんの困った顔はよく覚えています。多大な迷惑をかけたのに、次の日謝りに行くと、本当に大変だったよと嬉しそうに言われていました。

本当にあまりにもあっけなく逝かれてしまった菅野さん。本部にいればいつでも機会があるからと思っていましたが、こんなことになるなら、もっとたくさん話をして勉強させてもらえばよかったと悔やんでいます。

安らかにお眠り下さい。

菅野正純さんを偲ぶ

古村 伸宏（日本労協連専務理事/協同総研常任理事）

労協連合会の前理事長であり、協同総研理事長の菅野さんが亡くなられた。享年 58 歳という若さだった。

昨年 2 月 24 日、全国ケアワーカー集会 1 日目を終えた夜、自宅マンションで倒れられて以降、リハビリと治療を繰り返された甲斐なく、突然の訃報となった。最も本人が力を割き、自らの仕事と任じてきた協同総研の理事長職を遂げられずに逝かれたことは、本人にとっても私たちにとっても、残念の一言に尽きる。そして、この間労協連合会理事長として取り組み、いよいよ現実味を帯びてきた法制化を見ないまま逝かれたことに、非情を感じる。菅野さんを偲び、菅野さんを感じながら、決意を込めて仕事を全うする意味で、私の菅野さんに対する思い出と約束を文字にしたい。

私にとって、菅野さんとの関係は歴史的なものとなった。労協に入って 20 年。その最初の大きな仕事は、労協船橋事業団の立ち上げであり、1987 年 3 月から約 2 年半の間、菅野さんが専務、私が事務局長という立場で指導いただいた。事務局長といっても新卒 1 年の、しかも無能・不勉強の極みだった私は、菅野専務に労協の何たるかについて、その基本を教わった。この経験がなければ、今の私はない。そして、菅

野さんの実質的な最後の仕事となった労協連合会理事長就任と同時に、私も労協連に事務局長として出向してきた。センター事業団から労協連合会へ仕事を移すのをためらっていた私に、「一緒にやろうよ」と声をかけていただいた、その声と表情が何度も蘇る。

それから約 6 年、最近の 2 年は専務として菅野さんに仕えながら、自分の不十分さと至らなさに反省と後悔ばかりが胸を締め付ける。もっと自分がやれていたら、菅野さんはこうならなかったかもしれない。悔やんでも悔やみきれない。こうしていても、涙があふれてくる。心の穴と深い後悔は、簡単に克服できそうにない。人生最大の悲しみと悔やみの中に、今ある。

めったになかったことだが、菅野さんとカラオケに行った場面が、強く印象に残っている。それも、菅野さんが歌っている場面。目を閉じて思い出すと、歌声まで蘇ってくる。

♪ 古い奴だと思いでしょうが、古い奴こそ新しいものを欲しがるもんでございます。

どこに新しいものがございましょう。生れた土地は荒れ放題、

今の世の中、右も左も真っ暗闇じゃござんせんか。

何から何まで 真っ暗闇よ 筋の通らぬことばかり 右を向いても 左を見ても 馬鹿と阿呆（あほう）の 絡み合い どこに男の 夢がある ……………

なんだかんだとお説教じみたことを申して参りましたが、 そういう私も日陰育ちのひねくれ者、お天道様に背中を向けて歩く、馬鹿な人間でございます。 ♪

ニヒルに茶目っ気たっぷりに笑いながら、しかし瞳に魂がこもった歌い口とその歌詞が、菅野さんの生き様と重なる。また涙があふれる。

菅野さんはもうこの世にいない。遺志を受け継いで、などと簡単に言えないほど、菅野さんの意志は大きかった。そして菅野さんの探究心は大きかった。総路線で総力をあげないと、菅野さんの意志と探究心は引き継げない。覚悟してかからねば、鋭く

しかられるだろう。

本当に突然であり、リハビリに向かう手術予定から一転しての訃報。医療のあり方に怒りすら感じる。まだまだ心は回復しない。しかし、私たち以上にご家族の無念と悲しみは、想像を超える。私たちができる、ご家族へのあらゆる行いも、欠いてはならない。菅野さんが愛した、その全てに心して臨むことで、せめてもの償いにできれば。

菅野さん、残念で無念で仕方なかったでしょう。私たちもです。必ず、協同労働をこの世に根づかせます。法制化はもう目の前です。法律の中身と法制化後の世界を、菅野さんがいない中で切り拓かねばならない現実は厳しい限りですが、決してあきらめずに、努力の限りを尽くします。菅野さんの努力の域にはとても及ばないかもしれませんが、みんなの努力を総結集して、菅野さんにほめてもらえるように。

ありがとう、さようなら、菅野さん。

菅野さんの思い出 追悼 菅野理事長

田嶋 康利（協同総研専務理事）

手元に、『事業団・労働者協同組合について』という B5 判の小冊子があります。表紙には“労働者が主人公になる運動”と書かれたこの冊子は、今から 18 年前の 1990 年 6 月 23 日、労働運動研究会が菅野さんを講師に招いて行ったセミナーの講演録です。

私は、そこで初めて菅野さんにお会いしました。大学を卒業した翌年のことで（当時出版社に勤務していました）、日本の労働者協同組合運動（当時は、中高年・雇用福祉事業団）に直接触れた最初の機会となりました。講演のお願いに、高田馬場の事務所に伺った先輩方の話を聞くと、「中西五州さんという高名で、ご高齢の労働運動家がつくり上げた事業団ということで緊張して行ったところ、あまり歳も違ってないような若い方であったのに驚きました。私たちがその頃、ほぼ展望をなくし、うつむきかげんのときに、とてもお元気で、菅野さんはエネルギーギッシュでした」と言っておられました。

菅野さんは、講演の最後に『協同の総合戦略を！』と題して、「私たちとしては、協同組合セクターという考え方で、一つの協同運動にまとめていくということ。この中には協同組合と名乗ってなくとも、障害者

の共同作業所や自主生産企業や親子劇場など、金を出し合って、または労力を出し合って子どもたちの文化をつくっていくというような無数のそういう運動がある訳ですから、それを一つの協同運動に結集をしていく。しかも、その協同運動の中には労働組合もつながっていく、そうした総合研究所をつくろうと提起しています」と、日本の協同運動を大きく束ねるような総合的な研究所として協同総研を創り上げるとの強い思いを語られました（そのときは、まさか私が労働者協同組合運動関わるとは夢にも思ってもいませんでした）。

私はその後、1997 年に 10 年近く勤めた出版社を自主退職し、翌年 10 月再就職にあたって先輩に菅野さんをご紹介いただき、大塚の事務所で面接していただきました。菅野さんは「ぜひがんばってください」と言われ、また「10 月 6 日に労協法の出陣式があるから参加してください」とも言われ、その集会に参加したことを覚えています。

入団後の思い出（相談など）もたくさんあるのですが、最後に菅野さんとお話できたのは、2007 年 1 月の労協クラブでの新年会でした。当時、センター事業団九州事業本部の本部長として、福岡に赴任して 1 年半を経て、さあこれからだと思っていた

矢先、協同総研への異動の話があり、忸怩たる思いを抱え落ち込んでいたときでした。懇親会の席で、菅野さんが「いっしょに協同総研を盛り立てていこうよ」と言われましたが、そのときは、しっかりと応えることができませんでした。

その後、昨年7月、協同総研の総会の報告を兼ねて、菅野さんの2度目のお見舞いに病院に行ったとき、菅野さんは突然右手を出して握手を求められ、私が手を差し出すと、“ぎゅっ”と力強く握って、なかなか手を離してくれませんでした。何分間くらいだったでしょうか。菅野さんの協同総研にかける強い思いをあらためて感じました。私はおそらく、あのときの菅野さんの表情と手の力強さを忘れないでしょう。

私は、菅野さんとの出会いがなければ、この労働者協同組合という運動に関わることはなかったと思います。また、『労働者協同組合への招待—教科書づくりのために』（仕事の発見誌、1994年8月号、No.5）を読んで学ぶことがなかったら、『仕事おこ

しハンドブッカー市民の出資と参加で、コミュニティケアの拠点・地域福祉事業所を創ろう』を、編集することはできなかっただろうと思います。

いま菅野さんを思うとき、イタリアの革命家で思想家のアントニオ・グラムシが、自らのスタイルを『意志のオブティミズム、知性のペシミズム』と語ったことを思い出します。菅野さんほど、協同労働の仲間の実践や活動に熱くなり（ときには涙もし）、しかも自らの研究対象を狭い専門の枠にとどめず、協同の実践に結びついた理論や思想を、総合的に、冷静に研究する人はいなかったように思います。

いつかは、菅野さんのあのときの手の力に応えられるように、また2006年5月に菅野さんが出されたメモ『協同総研を「協同労働」の研究・開発・政策の一大知的ヘゲモニーのセンターに』（「協同の発見」誌187号に掲載）に応えられるように、これからしっかりと実践に移していかななくてはいけないと思っています。